

松葉名所和歌集第十二 佐幾由免

嵯峨 野原山寺 山城 葛野郡

相楽山 山城 八雲御抄并集 嵯峨

高橋

七二八 家集こしらに夜はすらし女郎花さかみへ花に匂ひてをみん

七二八 同 樟鹿も妻とふ時に成にけりさかへ花も下紅葉して

七二九 同 秋しと大宮へくる野へはすかのこもや花もみる見

七三〇 同 君と我行ふ道は夜ともにもさか野原もあうせてしな

七三一 同 めにつくはすくなくけり女郎花あまたおほるさかめなれども

七三二 同 女郎花あまた見捨て過ゆかはすかのこもと思ふへき哉

七三三 同 塩百見渡せばすかも栢野も成にけり今や小倉に紅葉散覧

七三四 同 六百さかの原走る雉子めかた跡はけふみゆきにぞくればさ哉

七三五 同 雉子鳴まの原のみゆきには古き跡をやまへ尋ねらん

七三六 同 山家集おぼかな春の日教のふるまにすかの雪は消やしね覽

七三七 同 山家集比里やさかみかりの跡ならん野山も里もあせはりけり

七三八 同 現六さかの山雲の春に引きてあてたえずもけふは渡るふを馬

七三九 同 建保くるともさか野は過ん衣衣宿にはなけり月の影かは

七四〇 同 拾玉わしの山のあるしをさかふつしめて浮世のさかはれり嬉しき

七四一 同 わが庵は都のいねい住侘ねうき世のさかと思ひなせ共

七四二 同 詠藻秋はもう都の西を尋ねればさかの花も咲ほしめける

七四三 同 玉吟むかへしすかたも月もさかへり浮世を照すさかの山本

七四四 同 天不月残るさかへ手の鐘の音に常に浮世の夢やなめなん

七四五 同 山人の帰る嵯峨野の追風に夕ぐれいづく小倉山かな

七四六 同 さかの山みゆきもうつす大井河もみちになまかり衣哉

七四七 同 御集にしへの子代み古道年へても猶跡ありやすかの山風

家持

伊勢

能宣

元輔

元真

同

師時

経家

兼宗

西行

西行

家隆

慈鎮

寂蓮

俊成

家隆

為家

同

家隆

源隆

同

同

同

同

七四八 万三 朝霧のほのめかし山城のさかへ山端を行過ぬれば

七四九 同 牙野沼 同 兼子 乙訓郡

七五〇 同 鏡古小塩山松風無し大原のさかの沼やまてまざる見

七五一 同 夫木いぬにけりまて野の沼や水ならん小塩の山に雪ぞ降つ

七五二 同 鷹坂 同 仙覚抄並集 冬世郡

七五三 同 丁九白鳥のさか坂山の松陰に宿りて行な夜も更行に

七五四 同 だくぬの鷹坂山のしらす我に匂はく妹にしめさん

七五五 同 山代のくせのまき坂神代より春は張つ秋は散けり

七五六 同 塩百白鳥のさか坂山を越くればさか峰に雪降けり

七五七 同 名寄 卯花の盛になれば白鳥の鷹坂山のしをりしと見る

七五八 同 かきりなきさか坂山かつし花色てくるまてにはや咲にけり

七五九 同 天木しら鳥のさか坂山の若つしはねと春の色はみえけり

七六〇 同 白鳥の鷹坂山は卯花の咲るふりこそ名に立けれ

七六一 同 草庵集絶ゆるかつし心もしら鳥のさか坂山のまつとせしに

七六二 同 沢田河 山城 類子

七六三 同 拾玉沢田川まきむ紐橋うきぬれば人も渡らず五月雨の比

七六四 同 一名寄すは河袖つくはかり浅き瀬や久遠宮人のかはし渡る

七六五 同 玉吟沢田河まきむつ橋中絶て霞そわたる春の曙

七六六 同 天不五月雨に水こえたり沢田河くに名人も渡す高橋

七六七 同 さはた川はれて人のみえこそは誰にみせしむの白玉

七六八 同 沢田河瀬の埋木あらはれて花咲にけり春の白浪

七六九 同 さはた川水みこころもあらはれて袖つくはかり白雪

七七〇 同 同

七七一 同 同

七七二 同 同

中務

先俊

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

七六八 同 沢田河ぬける春の葉は枯れかけさすなへに春更にけり

桜井里

同 葉塩

七六八 堀百み渡せば春のけしきに成にけり霞たな引桜井の里

七六八 葉集小井つむ沢の水のみ絶て春あき初る桜井の里

七〇八 新六花散て春は暮にし桜井の名にうへあけてむかふ比哉

七二八 同 今もくしる思ひ出つる桜井の里に人ほ恋しかりけり

七二八 名寄秋風の吹に散がふ紅葉と花を思ふ桜井の里

七三八 夫木越くれば地なりけり桜井の里をみたりたかき所也けり

七四八 同 花をみし春の錦のなごりも木葉色く桜井の里

七五八 夫木桜井の里に春は花をみて秋は桂の月を詠めん

桜本

山城 類字

七六八 玉葉のふはいと桜本こそゆかしけれ春の形見に花を残ると

西園寺

同

卯月のついたらの比内より女房ともなひて時

鳥聞にして西園寺にまかりける初声聞て

詠侍ける

七七八 続後撰子規寺ぬにきつる山里のまづにがある初音も聞

西園寺の池を見て

七七八 詠古なうへ心とくめし流つせを今はかたみの涙にぞかる

西園寺の花を見て

七七八 新撰山桜みねの春と植まきく袖のみねとす花の下露

佐野渡

大和 類字

好忠

七八〇 万三 苦くも降くる雨のみわ崎すの渡りに家もあらなくに

七八一 拾遺宿もなきすの渡のさのみやはぬれてもゆかん春雨の比

七八二 愚草 行ななき宿はしとくは泪のみすの渡の春雨の空

七八三 秋夜 宿もなき月に行へき道なれやすの渡りの秋の旅人

七八四 拾玉 今宵をば秋の最中とかきへつ佐野の渡の月をみる哉

七八五 夫木 三輪の崎夕塩させは村十鳥すの渡りに声うつるかな

衣笠

実方

佐保山 河

同 類字 添上郡

和歌

七八六 万三 佐保山にたなひく霞みる毎に妹を思ひ出てなれぬ日はなし

為家

七八七 万三 昔きこもよにもみしかわきも子か奥御と思へはほしきさほ山

藤中

七八八 同 四すほ川の石ふみ渡りうは玉の駒うくる夜は年にもあらぬか

七八九 同 千鳥鳴まほの河をの瀬をふみ打橋渡すなごと思へは

七九〇 同 すす竹の大宮人の家とすむまほの山を思ふやも君

同侍

七九一 同 おもほえすきまざる君をさほ河の蛙をかせて帰りつるかも

七九二 同 佐保川の清き河原に鳴鶴蛙とふにた忘れのねつと

七九三 同 さほ河に鳴なる千鳥何しも河原を思ひや川のほろ

七九四 同 佐保山をおほに見しかと今みれば山はかくし風吹なゆめ

七九五 同 八打上るさほの河原の青柳は今は春へ成にけるかも

七九六 同 卯花もいたさかおほ郭公まほの山へを来鳴しよます

七九七 同 うは川の水をせき上て植し田を新早飯はひとりなるへし

七九八 同 十答へにばよもみよ呼子鳥まほの山へを上り下りに

七九九 同 十二まほの内に風ふければ帰るまはくたけて歎きぬるよしおほき

八〇〇 同 佐保河へ川波たすしつりくも君にたぐてあすさへもかも

八〇一 同 思ひ出る時はすなみまほ山にたつ雨霧のけなへくおもほゆ

八〇二 同 廿さほ河に水渡れさうすらみうすきにも我思はななくに

無名

家長

定家

春宮

巻録

実家

無名

無名

無名

同

足人

益人

無名

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

八〇三 八 家集 秋風の吹につけてもふもほゆるさほ山へは今やもみつる

八〇四 八 同 さほ山 林の紅葉散にけり恋しき人を待とせしに

八〇五 八 同 秋霧のたぬさきにさほ山のさみちの錦のころりけり

八〇六 八 同 佐保山の紅葉の錦いろとももてや空に霧の立見

八〇七 八 同 初雁の夜ふかりつる声によりけりさほ山と思ひやらるゝ

八〇八 八 同 堀首さほ河の岸のまじくむれ立て風に波よる 青柳の糸

八〇九 八 同 さほ山に柳の糸をよめかけて心のまにに風をふくくる

八一〇 八 同 佐保山に紅葉の錦をりかけて霧のたつじもせたりける

八一一 八 同 堀首霧立ちわけてもみえぬさほ河のしるへは夜半の衡也けり

八一二 八 同 夜や来き友を志しきねてきけはさほ河原に千鳥鳴也

八一三 八 同 せり清みながら絶せぬさほ河のせまりの波や代の数

八一四 八 同 後君が代の数にしとらは打のほる佐保の河原の石も絶しは

八一五 八 同 拾玉さほ山に霞の衣かけてけり春のさぬとや人の見らん

八一六 八 同 夏ばらへ更行空を詠わはやけて身にしむさほ河の風

八一七 八 同 御萩する佐保の河風かけぬらし三笠の山に早鹿の声

八一八 八 同 千五百番行はさほ風寒し旅人に宿春日野はいく成らん

八一九 八 同 新高高瀬ですすほの河原のくぬきほら色つくみれば秋の暮かも

八二〇 八 同 名寄うち獲す佐保の川橋中絶て下にとつた岸の青柳

八二一 八 同 玉吟 樹生るさほ河原に立千鳥空さへ清き月に鳴なり

佐権限

大和

藤原高平卿

八二二 八 同 万二夢ににみさりし物をふほつかぬ宮出もすさひのくまわを

八二三 八 同 同七ささみの隈のくま河の瀬をはやみ君が手もろほらんてふかも

八二四 八 同 同十三ささみのくまのくま川に馬とめり馬に水か我よそにみん

八二五 八 同 堀後ささみの隈はま(日暮は別る共し)のみきりにあはさるやも

家持

八二六 八 同 千五百ささみのくまのくま河にうらゝめて駒もとめす冬の曙

信明

八二七 八 同 建保ささみの隈のくま川にぬる袖ほさるや人の面影を見ん

元真

佐太周

同

八室御抄巻四

忠見

八二八 八 同 万二朝日てさしたの岡へにむれぬつ我なく泪やむ時なし

中務

八二九 八 同 よしなぐさしたの岡へに帰りのほ鳩の御橋に誰やまほん

師頼

八三〇 八 同 朝日てさしたの岡へに鳴鳥の夜なきかへらふ此年比を

顕仲

八三一 八 同 万二なら花の鳩の宮にはあかすかもさしたの岡へにまゐしに行

永縁

八三二 八 同 万二なら花の鳩の宮にはあかすかもさしたの岡へにまゐしに行

基俊

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

肥後

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

兼昌

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

慈鎮

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

同

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

同

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

同

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

同

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

衣笠

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

衣笠

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

衣笠

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

衣笠

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

衣笠

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

衣笠

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

衣笠

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

衣笠

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

衣笠

八三三 八 同 万二春日なる三笠の山に月も出ぬかもささ山に咲る

家長

雅経

雅経

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

八四二 同 猿沢の池のあめめ玉おつらむのしをけりてねぞ残りける
 八四三 長根集さる沢へ池もつらしな我妹が玉もわづらは水もひなまし
 八四四 玉對基身を捨ば哀ともみ猿沢のいける世にこそ情なからめ

佐野 池

河内 薬塩 上野有同名

八四八 正治言けさみほりきぬの鴨はめぐりて水うひたるさの池水
 八四八 名寄たすよ松の葉こしに波をけて夜ふかくおしさの月影
 八四七 天木冬の日もふられ降は朝たては波になみこすさの松風
 八四八 同 しまなつむ佐野の朝けにみ渡せば松原とをく降る白雪

讃良

河内 和名吉田堀集部

八四九 新六さる音もさるへ河内路に駒もはやめてけふもくらし
 佐太池 川 同 薬塩

八五〇 大船我せじかふゆるかふしすたみ池の玉にもかなりあけはやさん
 八五一 名寄駒はへいふみゆかんすに川に枝しはすやまとてしん

堺浦 海

和泉 類聚二巻記伊予有同名

八五二 類聚行春のまかひの浦のさくら鯛あかねたみにけりや引見
 八五三 天木夏と秋と堀の浦の松風にわたる涼しくする白浪

佐伯山

摂津 八雲御抄 薬塩号

八五四 万七さく山卯花もたも哀れ我子をしとりては花散ぬ矣

佐比江 橋

同 類字

八五五 使擲年まへて濁りたせぬさ比江には玉も帰りにて今そすむへさ
 八五六 懷中みさひめしう比江の橋の下水も書し渡らは影やみゆ見

五月山

同 類字 一説佐伯山

八五七 万すつき山卯花月と郭公すけともあかす又鳴んかも
 八五八 同 五月山花橘に時鳥かくるふし時にあへる君也も
 八五九 同 すつき山ともしにける狩人ほものか思ひに身をやらん
 八六〇 塩百五月山嶺に鹿も心せよとしみせなむにけるわり

八六一 同 雲間なき五月の山み木の下はともしするにけり屋もみける
 八六二 月清五月山ともしにけれし平鹿の秋は思ひに身をしほらん
 八六三 新六五月山雲ははねねし時鳥卯花月よさかにそ啼

八六四 天木杜鵑尋ねにゆかんす月山卯花けに鳴すれもあらし
 八六五 同 よる重ねおなのをさふしなまも鳴や五月の山時鳥
 八六六 同 五月山雨に雨さふ夕風に雲より下を過る白雲

行家 行能 雅重 知家 俊家 重成

佐堤崎 伊勢 薬塩 王市原

八六七 万四あここの山五百重かくせるさの崎さへし子み夢にしみゆる

同 幸橘 同 薬塩 八雲八

八六八 名寄類もしき名にも有かなめてゆかほまさはな橋を渡らん

同 松宮 同 類字 西行 神主 為家 俊成

八六九 繞古神風に心すくく佐へる松の宮の花のかりを
 八七〇 拾玉手向まて言葉の花に色へてすくく宮に恵あうらし
 八七一 天木春ほまつ名にわててて尋けれ松の宮の花の木末を
 八七二 同 名をも思へ松の宮に祈見ん花をくらすぬ神風もかな

鶯嶋

同

八七三八 家来さき嶋のこいしの白たが波のたふしの浜に打せてけり

佐夜中山

遠江 類字

八七四八 帖東路のさやの中しけくとも君きまづねと面影もせし

八七五八 百嵐吹くれの雪を打はらけふ越かぬるさやの中山

八七六八 六玉枕にも跡にも露の玉うりてひとりかきぬるさやの中山

八七七八 拾玉雲の都の空を詠あつてけふも越つるさやの中山

八七八八 同 帰くる旅のあはれを人といへ月に越こしやの中山

八七九八 名寄古郷をふけてぬ夢のかなしは臥ほともなきさやの中山

八八〇八 同 かのねをさやにも見しおけくなくよこほりふせるさやの中山

八八一八 愚草 露しけさやの中山中くにててすくる都ともかな

八八二八 同 閑の戸をさやに人ほ出やうて有明の月さやの中山

八八三八 玉吟 旅人の草の枕にまくたらのさやの中山けさや越なん

八八四八 同 忘るなよ又帰りこん東路のさやなか山中たなんぬとも

八八五八 千五百 行年の名残の空も更ぬれは春や越らんさやの中山

八八六八 月清明方の佐夜へ中山露おちて枕のりに月に月を見る哉

八八七八 同 雲は閑月ほもし火かくしてもあがせほ明るさやの中山

八八九八 建條 篠の葉のさやの中山吹風にをれぬぬも夢も結ほす

八九〇八 夫 不ふしゆぬ旅の袖を袖の葉に降やあられぬさやの中山

八九一八 同 跡もなく八重立雲に道分て涙くるさやの中山

八九二八 御衆 秋の月隈なき比ほとりせしるにやわづらさやの中山

八九三八 同 あみかても中しつらさやの山すやは契りし嶺の月影

八九三八 名寄 づらけれは思ひはなる人しもそとるほしほしみぬほしき

佐留橋

遠江 桑塩

西行

崎守塩江

駿河 八雲御初

八九四八 万廿さきもりの塩江漕なるいつて船揚取まなく志ほしけん

師頼

指出磯

甲斐 類字

後京極

指出磯

甲斐 類字

慈鎮

八九六八 六百浪のくるさして磯の岩根松ぬにあらはれてかほく問もなし

同

八九八八 拾玉君の代に指出の磯の及千鳥八千世の声を聞そうれしき

雅経

八九八八 名寄 龜のこふさして磯に散くる花もかぬぬいらくすやう

足家

八九八八 玉吟 冬の夜の有明の月も塩の山さしての磯に千鳥鳴也

同

八九八八 新六 こよひの月も満ける塩の山さしての磯に雲もかゝす

同

八九八八 天不八千代とも千鳥鳴なる塩の山さしての磯に跡を尋て

同

八九八八 年ふとも色はがほらし若ぬぬのうし出の磯をあらふ白浪

家隆

八九二八 同 波の上や猫すみまも海士小船指出の磯の秋の月影

同

八九二八 同 みつ塩の指出の磯にすむ月ほ千世もわづらし久方の空

有家

八九四八 同 満塩にぬかれても又立帰れし出の磯のあまの釣ふね

同

八九四八 同 満塩にぬかれても又立帰れし出の磯のあまの釣ふね

後京極

八九五八 御衆 しほの山指出の磯のしき浪に千とせを祈る度衡かな

同

八九五八 同 満塩にぬかれても又立帰れし出の磯のあまの釣ふね

順徳院

相撲市

相撲 一説相撲池にありて

知家

九〇六八 夫 木布さす足やさかみの市ならんさ分衣ぬきもかへばや

長寿院

相撲鎮

同

後鳥羽

九〇七八 万十四さかみのをみぬみくし志くる妹か名まきて音をねしぐに

同

九〇七八 万十四さかみのをみぬみくし志くる妹か名まきて音をねしぐに

同

九〇七八 万十四さかみのをみぬみくし志くる妹か名まきて音をねしぐに

同

九〇七八 万十四さかみのをみぬみくし志くる妹か名まきて音をねしぐに

同

九〇七八 万十四さかみのをみぬみくし志くる妹か名まきて音をねしぐに

同

九〇七八 万十四さかみのをみぬみくし志くる妹か名まきて音をねしぐに

同

九〇七八 万十四さかみのをみぬみくし志くる妹か名まきて音をねしぐに

同

九〇七八 万十四さかみのをみぬみくし志くる妹か名まきて音をねしぐに

同

九〇七八 万十四さかみのをみぬみくし志くる妹か名まきて音をねしぐに

同

九〇七八 万十四さかみのをみぬみくし志くる妹か名まきて音をねしぐに

同

九〇七八 万十四さかみのをみぬみくし志くる妹か名まきて音をねしぐに

同

九〇七八 万十四さかみのをみぬみくし志くる妹か名まきて音をねしぐに

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

無名

九〇八 同十四さき玉の津にをる舟の風をにけみつなはたゆとも事な絶やね

狭山 池

武蔵 類字 一説河内

九〇六 穴貳蔵なるさ山か池をみくりこそ引はたえすれ我や絶する

九〇八 塩俵春ふみさ山か池のねねはくるもしやなく鳴蛙かな

九二五 百ふみみし山は雪に跡絶て池のみくりはくる人もなし

九二八 愚草凍のみむすふさ山の池水にみくりも春のあくる待らし

九四八 天ふやれ草さ山の池の長き根をこれもみくりはならひこそ引

九五八 同 さひしに野へに立出て詠れはさみずそに銭虫そ鳴

九六八 同 狭山なる池のみくりもねもみねと打はへくるそまたた

盆井

下総 藻塩

九七八 藻塩東路にうしてこんとは思はねと盆の井に影をうつして

佐加登宮

常陸 藻塩

九二八 天木あすましやさかとの宮のかりみやのあやみたれてこそや朽なん

桜河

同 類字

九二八 後撰つねよりも春へになれば桜河花の涙こそまなくすすめ

九〇八 天木風吹は浪もいくへさく川名に流たる水の春かな

九二八 同 秋の夜は月とさなる桜河花はむかし跡の白浪

佐野舟橋

近江 上野二同名

大宮会修記方御厨風々俗歌近江国

九二八 名寄山本ささの舟橋せうになあき事をいひわたる哉

九三三 藻塩あふみちやさの浜へ駒とめてひらの高ねの花をみる哉

九二四 愚草冬の日をあられ降はへ朝たては浪に波すすすま、松風

同

九二八 夫木もろくは波のよそにも三輪崎さの舟橋かけし思ひを

九二八 天木藤原やさのくくらさかなにて旅行人をしるも人

桑波郡

近江 類字 志賀郡

仲実 九二八 万一人に我あるらめや波の古き都をみれば悲し

季能 九二八 同 さ波の国つ山神の浦さびて荒たる都みれば悲しも

是家 九二八 同 三かく政に見しといふ物をさ波の古き都をみせつ本

兼直

匡房

醒井

同 藻塩

光俊 九三〇 名寄浪でしる人しもあらはれぬ清き心を哀れや見ん

九三八 同 詠ふ手ににる心をすまはば浮世の夢やまめかぬ水

九三八 天木わくらにゆきても見しかまめか井の古き清水に宿る月や

九三八 同 河をなる末まき清し若間よりあまりて出る醒井の水

119

小竹生藏

同 藻塩

光俊 九三八 衆葉もつてみいぞしうまふ時雨してつひに檀紅葉しにけり

九三五 名寄田上のさふの苔もしくるやけり今やまゆみの紅葉しぬらん

九三六 同 嵐吹さふの山の夜のほとに音もそよほす積る白雪

中務 九二八 天木君が代の数をかぞへて取つまにけしりけりまめ石山

九三八 名寄うきなまき石山むしき千世に八十代に数もそひけれ

匡房

坂田

同 類字 坂田郡

定家 九三六 新古近江のや坂田の稻を刈つみて道ある御代か始にぞつく

俊成

忠定 124

仲正

碓冰

黒人

中務

鎌倉

為相 122

桜谷 近江 藻塩

九四〇 名奇春なると桜谷にはみにゆかしこりともしりね道の遠さに
九四一 天木には照や桜谷よりおちきなる波も花咲うちの網代木

同 藻塩丹波三有同香

九四二 詠藻松がなにと枝ぎしはすくら山花も千年の春や白はん
九四三 名奇みかひなる桜の山は花蓋ちるてふ事しはあらしと思ふ

九四四 同 桜山花咲白ふかひありて旅行人も立とよりけり
九四五 愚草 大才へまはぬ雲もかほらん桜の山の春の明ほの

九四六 天木 桜山梢の雪のうねるは折にかへぬる花ごとくみる

堺入江 同

九四七 天木さく波やさかひの江かけみえて旅人もよふ浜の細道
九四八 六百さらしなる明石も爰にうてひきて月の光は玄沢の池

九四九 建保けるかなる月の都に契ありて秋の夜あかす更級の里
九五〇 同 更級の里をはかれぬ月の夜もとふへき物と人はよにけす

九五二 同 我としもそはぬ月にしほれきぬ誰を恨ん更級の山
九五三 同 鶺鴒なゆふの空をあはれきて月にふけ行更級の里

九五四 同 をは捨の山より月のいくにもそも更級秋の空かな
九五五 同 東路やつくはあれと更級の里とひ出る夜半の秋風

九五六 愚草 尋みよしさらしな月のなはなぐさめぬる心しるやと
九五七 玉吟 更級の里の草葉はうら朽てかれすそ人は月にとひける

九五八 同 月すまんぞ空の気色にて鶺鴒なり更級の里
九五九 同 影さゆる月よりほかの浮雲に散こほるゝ更級の里

九六〇 拾玉 さらしなや姥捨山の夜はよりも吉野の奥の春の曙
九六一 同 秋の夜はよも更級と思ひしをば捨山に雲のわける

九六二 同 月は秋と思ひふりにし空ながら今更級におとろかれぬる
九六三 名奇里の名を秋に忘れぬ月影に人ぞはつらきさらしな里

九六四 御集月ならぬ雪も有明の冬空くもらは雲れ更級の里
九六五 月清 更級の月やは我をさそひしにたすこもく宿の夜は

九六六 同 さらしをいれうちに尋ねは都の月も夜をひけり
九六七 同 雪の夜も光もふじ奉の月雲にそはる更級の里

九六八 万す四かみつけのさくくたち折はやしあれはまたん今今年こそとも無名
九六九 同 かみつけのさの田の苗へ村なへに事は定つ今はいかにせも

九七〇 同 かみつけのさの、舟橋取はなし規はそれとれはすかるかへ
九七一 坂百五月雨のいくかになれは瀬たえせしの中河舟通ふらん

九七二 同 東路のさすゝ舟橋くらねとも妹しまためはさよさらめや
九七三 同 後いかせんさの、舟橋さみかほふみにに見しと人のいふさ

九七四 名奇集 五月雨にさの、舟橋つさぬれは妻とてはさし渡るらん
九七五 名奇 東路の雪のあしたは白波か下より渡す佐野の舟橋

九七六 月清 東路の佐野の舟橋しら浪の上より通ふ花うちる此
九七七 愚草 志渡るさゝ舟橋おけたえてへやりならぬをのみみなく

九七八 同 ことつてよさゝ舟橋はるぬなるよとへ思ひにこかれ渡ると
九七九 玉吟 思ひ入波ををられた尋ねへさすゝ舟橋えやほりこかん

九八〇 同 天原月にささ入心ちしてしはしやすらふさゝ舟橋
同 家隆

佐野 田 舟橋 中川 上野 菊守

九八八 建保人しれお心をいづのやみつけやかけてもふりぬさう、船橋

九八二 同 東路のさう、船橋霧こめてもきにのみやは思ひ渡覧

九八三 同 尋ても渡らん中の目へて影たはつるすの、船橋

九八四 同 中しに帰る心もくるしに絶たにたねさの、船橋

九八五 同 かけて猶い夜かこみんよたのみ聞こそ渡さの、船橋

九八六 同 絶ねたうきにつれなき身成ともさのみはまたしらす、母はし

九八七 同 東路のさう、船橋にたつらに渡りし心袖やぬれなん

九八八 夫木 五月雨にせきりの浪のちかへりすの、中河 水まする也

九八九 同 畑たつ里のしるへをぬけてきた程速しさの、船橋

九八〇 同 せきりせしすの、中河つら、ぬてぬに波の音絶にけり

佐波古御湯

陸奥 類考

九八八 拾遺あがすして別し人の住里はさはこのみゆる山のあなにか

九八二 七節抄 みかくれにふかきさほこのみくりなほ月日はくれと引人ほなし

九八三 夫木 よと、もたけかし身を陸奥のさほこのみゆといはせてしめな

辟田河

越中 弘寛抄、白河

九八八 長歌 足引の山下さみ落滝うなかるさき田の河の瀬に

九八五 同 紅の衣にほはしき田川絶る事なく我かへりみん

九八六 同 年のほに鮎りしれほさき田河橋やのきて川瀬尋ん

九八七 名寄 辟田河下す鶴舟にすす棹の音さゆるまて夜は更にけり

堺河

越後

九八八 堀百 舟もなぐ若浪高きかひの川水まよりなほ人も通はし

佐渡海

佐渡

行意

足衡

佐成セ

知家

範宗

行家

康光

具親

為家

俊頼

九八八 玉吟さとの海吹くる風の方もうし詠むる袖にあつる泪は

〇〇 九葉塩 君が代の若ほとならん行末も数もさうぬく小石山

〇〇 〇〇 佐々礼石山 丹波 藻塩

〇〇 〇〇 桜山 同 藻塩

〇〇 九名寄 桜山ちるへき花もなかりけりあらさ風たにふかぬよなれは

〇〇 二十首うれやみし桜の山の青木立面影うつく茂り合ぬる

〇〇 酒井村 同 類考

〇〇 三玉葉八隅しるめが皇の御代にこそか井戸の水もすみけれ

〇〇 四夫木わきかへり酒井の水も澄にけりおほしき御代の初に

〇〇 左太乃浦 出雲 藻塩

〇〇 九百丁 奥つ浪へみさよるさき浦の此すた過後後志んかも

〇〇 九百丁 浦にまする白波ふたたく思ふに何そ妹にあひかたき

〇〇 九玉吟あふ事ほいと足ぬねさた浦の波のくしほ悲渡る覧

〇〇 八名寄人心思ひ出るもいづもなるさた浦浪さたぬかぬつ

〇〇 〇〇 同 家隆

小竹嶋

石見 類考

〇〇 九百七 夢にみ継てみゆれはさ、嶋の磯とす波のしく、おもほゆ

〇〇 九 曉松さ嶋も渡る月の影さえて磯とす浪に秋風さふく

〇〇 九 曉松塩風音はかりしてさしき磯とす浪も霞む春成

〇〇 二名寄あふ衣夏ともしらさき嶋のいそとす波に宿る月影

〇〇 三 同 冬の色はそれともみえぬ小竹嶋の磯とす波に千鳥さく也

〇〇 四 夫木さ、嶋の磯とす波にたつ千鳥心もぬれてなかね日な

〇〇 五 同 小竹嶋の磯の白浪たつを鳴すむや汀の夜寒なるらん

〇〇 六 新葉よもすから塩風寒てさ、嶋の磯とす波に立千鳥かな

密語橋

備後 藻塩

家隆

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

〇二七 懷中くまのなる音無河に渡さばやまの摘しのひ／＼に

佐波郡

周防

和名云佐波郡

〇一八 夫木嵐に吹さすの鳥を吹やまは次の水はうすくなるらん

柞田

記伊

和名云柞田

〇一九 万三 柞田へたの鳴渡るあゆちかた塩にけらし田鵜啼渡る

〇二〇 現六山風の色吹おろす柞田の曲代水を花にせきつゝ

〇二一 夫木あゆちかた塩満ぬらし柞田のほむけの風につ鳴わたる

佐野岡

同

和名云佐野岡

〇三九 万三 秋風へ来き朝けをすゝ岡越らん君にうねおすましを

〇四〇 就古すの岡越行人の衣手に来き朝風の雪は降つゝ

〇四一 名寄 佐野の岡ひより越ん秋風のさゝ来き朝あけ

〇四二 夫木今夜もやまの岡へ秋風に篠葉かりふき独かもねん

雑賢

同

和名云雑賢

〇五九 万六 左日鹿野にそかひにみゆる奥へ鳩清き渚に風吹は

〇六〇 同七き国のさひかの浦に出みれば海士のともし火波間よりみゆ

〇六一 夫木 記の国やさひかの浦におきつゝも春の日らしつく養人

坂上

記伊

和名云坂上

〇七九 万九き国の音弓雄のかふらもて鹿より靡く坂上にさめる

篠宿

同

和名云篠宿

マのすくにて

〇三〇 山家集 庵さす草の枕に友なれてさの露にも宿る月哉

〇三九 名寄 小鹿ふす篠の原のしの薄うらまひしけにみゆる山里

〇四〇 夫木 打頼みかたしく袖も沾にけりてさやとすはひする日は

柞茅

曝井

同

和名云柞茅

〇三九 万九 柞茅の中へるさらしめの絶す通はんさしに専もか

〇四〇 散木さらし井の木の下陰に雪ふれば衣手寒し蟬はなけとも

〇四一 夫木 山陰の霏ににる露井のおつも見えす五月雨の比

〇四二 公朝 みるすのなかにむかひて結さんうすき衣のさらしめの水

逆河

同

〇三九 夫木 能ぢか小夜半の登の光にそまき川へ頼とはしらるゝ

〇四〇 夫木 開渡る名まへうらめし熊野路や逆河のせをいかせん

〇四一 夫木 左奴山

同

和名云左奴山

〇四二 万六 万六山にうやをのとのほか共ねもとかうかおゆにみえつ

赤人

里海士

阿波

和名云赤人

〇四九 名寄 里海士はなるとの波にみなれてたぐ水鶴にふとくね哉

〇五〇 同 浦風に花も白はぬ里のあまの垣ねも登るそなく

〇五一 名寄 里の海士のつむや塩木の幾重まてうねてからく物思ふ見

〇五二 月清 ばにけり一夜宿す里の螢の今朝も袖しほれつゝ

〇五三 玉吟 里の海士の夏の衣ををる波の日影も薄く浦風を吹

〇五四 新葉 里の海士の袖の春風長閑にけりにくらす春の夕なま

〇五五 里のあまの塩なれ衣忍へてからく別形見にそやる

〇五六 同 里の螢の塩なれ衣とよめてもばからへばこそかたのみともみ

行僧正

素寛

俊頼

素寛

公朝

薄間

為家

人丸

仲正

家隆

重時

後家隆

御製

文良公

妙光寺

内大臣

〇四八 天木里の海さの塩や衣打音もまじをにひく風の音哉

家長

〇六一 風雅春山のさき薄き分てある若に淡雪く降

基俊

松間池

阿波

和名三島郡
名所三島郡

〇四九 天木鏡にも見るき物を春くれはちりのみなる松間の池

不説知人

〇六二 万すきぬたの野へ秋萩時しあれば今盛なり折ておらん
〇六三 新六このぬぬる秋風来しすぬたの野へ秋萩今ちらんか
〇六四 名身今はやじりぬも晴ぬすぬたの野へ真萩折ておらん

為家
康元
207

狹峯嶋

讃岐

八雲御抄

〇五〇 万二遠近の嶋はふほかれとなくほしきみぬの嶋の荒磯もに

人丸

〇六五 万十四さづらの岡に粟まき悲しきかまはたきもわはそとほし

無名

〇五一 夫不たすれほすみぬの嶋に鳴千鳥荒磯みちに塩やみつらん

顕盛

左奈都良岡
神楽良小野

同

無名

佐美山

同

八雲御抄

〇五二 万二妻もあらは取てたきしきみの山野上のうはき過にけらすや

人丸

〇六六 万十六天にあるやさらの小野にちややかりはかに鶉をにつも

無名

佐屋形山

筑前

類考

咲野

同

無名

〇五三 後拾あなし吹迫門の塩あひに舟出して早くも過ぎや形山を

通俊

〇六七 万十女郎花さく野に生る白すしき事もていけりわかせ

忠頼

〇五四 天不夜舟漕せと塩干をよそにみて月にと越るさかたの山

中務

〇六八 行櫓中色くのさく虫を宮人の花すり衣まてて取なる

忠頼

〇五五 同 あなし吹佐屋形山に雲晴て月影にむせとの白浪

第三

逆池

同

忠頼

薩摩迫門

薩摩

長田王

〇六九 天不ゆく事も帰らぬ物をいかにかはいひかへすへきさかまの池

施拳

〇五六 万三草人あつたせとも雲あはす遠くも我ほけふみつるおも

公朝

〇七〇 千五百あくるまてくるもしらぬ空の雲軒まてつる五月雨の山

家長
214

〇五七 天木さつま迫門のほやみの塩さひはたき過ぎよかりおろさて

未勘

〇七一 天木瀬をはやみ五月雨の中ゆけはみおつ海に思ひこりなせ

順

〇五八 名寄草人あせとも老ほにあゆはしる吉野の滝に猫しきすけり

未勘

〇七二 天木名にしおほきこにもあかくみゆるかなさや山より出る月影

泉武都

篠河

未勘

家隆

〇七三 家集濁りなき清滝河のまよけ小は底よりさくともゆる藤なみ

忠今

〇五九 万廿さ川のさやと霜夜になへかる衣にませるころかははたほも

家隆

〇七四 家集濁りなき清滝河のまよけ小は底よりさくともゆる藤なみ

忠今

佐織野

同

清滝

河 山城 葛野郡

忠今

- 一〇九 名奇秋風吹くは貴船山をほにありて鹿鳴鳴
 二〇九 小夜更なるふねの集の山風にさねの鼓のたふろしなる
 二二九 清石走る水はうらや貴布祢河玉ちるはかり物おもふ比
 二三九 玉吟音より人ほ渡れときふね川せの若かたれすも有哉
 二四九 雪深き山中行きふね川すすかに残る瀬の岩浪
 二五九 千音き船川玉ちる瀬にまかひてもかきも果ぬ夏虫のかけ
 二六九 御集貴船河若うつ波に飛渡たみくから玉にか有らん
 二七九 大木五月雨ほりのにきふねの川杜ねれてほすへき夏衣哉
 二八九 頼みくるゆも涼しきふね河若ねをこゆる港の白玉
 二九九 同 つたふるきふねの宮の榊葉のちよとすしてもあかぬみかな
 三〇九 同 君が身はきふねの宮に仕せたりしつめは神の名こそ立なぬ
 三一九 同 みつかみ陰にそみゆるきふね川久しくすめる神の心ほ
 三二九 同 五月雨は岩波あらし貴船河杜とは是にぞ有ける
 三三九 草葉集たる瀬に有ける物もきふね河袖のみぬれし水の白浪
 三九 拾玉くりかへし乱て人を渡すかき清水寺の港の白糸
 一五九 衆集清水の山郭公聞つれば我古御の戸にかほらぬ
 一六九 一き秒きよみつの水を分る港の糸はいともよこそむすほれつ
 一七九 大木をみするたために妹が見られついらを清水の港
 一八九 月の色も風の音も清水の港にたきそふ花の白浪
 二九 衣笠岡 山 同 葛野郡

- 成助 一四九 夫不紅の衣笠岡の若つし白影さしてそ色増りける
 寂蓮 一四九 同 きてみれば衣笠岡に立鹿のよをわねても忘る妻哉
 徳宗福 一四九 同 神祭る衣笠岡の若ね松えしく立れときほかきけに
 家隆 一四九 同 首哀た衣笠岡の若つしせれもあか物風にみんつ
 越前 一四九 同 清滝宮 同 山階篇
 磯島 一四九 同 醍醐の清滝の杜に歌合しける時詠る
 為家 一四九 同 千載降雪に軒端の竹も埋れて友こそなけれ冬の山里
 威家 一四九 同 拾玉雨そくしるしそ空にあらはるる豆取山の清滝の宮
 衣笠 一四九 同 狐河 同 天不吉田
 成助 一四九 同 天木とにかくに人の心まつね川かけ頭れん時をこそまて
 顯昭 一四九 同 象山 山 大和 仙覺抄 吉野郡
 俊成 一四九 同 萬一やまにほ鳴てみらん呼子鳥さすの中山のみよこゆなる
 傾河 一四九 同 五九 同六み吉野の象山はの梢にほこたもさく鳥の声かも
 慈鎮 一四九 同 五九 同 名寄五月雨ににふ河原の私くたし引ねだする象の山まほ
 元真 一四九 同 五九 同 古御は寒く成らしみよしめさすの中山時雨降なり
 永源 一四九 同 五九 同 十五み吉野の象山蔭に待月ほす市の里のかけよりそみる
 俊忠 一四九 同 五九 同 御果みよしめさす山蔭に散花ほ松につもれる雪かきと見る
 一五九 夫木大和路に越へき道は絶にけり象の中山雪深くして
 一六九 萬三我いのちも常にあくらぬ昔見しきさの小川を行てみん為
 一七九 玉葉むかし見し象の小川を今みればしく清く成にけるかも

- 為家 一四九 同 為家
 安芸 一四九 同 安芸
 隆房 一四九 同 隆房
 為尹 一四九 同 為尹
 不龍 一四九 同 不龍
 慈鎮 一四九 同 慈鎮
 為家 一四九 同 為家
 大伴 一四九 同 大伴
 家持 一四九 同 家持

一五八 詠古みる夢の佛までやうかふらんきさの小川の有明の月
一五九 天不苔みむす岩のけ道水にたて象の小川の五月雨の比
一六〇 同 茅野小青ねの顔に月すめはさみ小河に玉を沈める

清御原 同 八雲御抄

一六二 長歌 飛鳥の清み原の宮に天下しらめしやすみし
一六三 同 城上宮 同 名号より

一六四 万二朝もよみさの上の宮を常宮と高くしに神のまに
一六五 同 同 三きの上の宮に大殿をつかへまつりてのくもり

服植里 ム 同 添上郡

一六六 万六唐衣きならの里の鳴まづに玉をしつけんよき人もかな
一六七 同 十二 恋衣きならの山に鳴鳥のまなく時なり我ふらくは
一六八 名号さほ姫の霞の衣たちそめてきならの里に春雨そ降
一六九 愚草 旅衣きならの山の嶺の雲かすなる夜半をしにふ夢哉
一七〇 玉吟 鳴鳥の声もつらめし恋衣きならの山の帰るの空
一七一 天木 松ならぬ柳の枝も玉つりてきならの里に春雨そふる
一七二 同 かり衣きならの里の形見とて花橘も袖の香をすする
一七三 同 忘るなよきならの山の杜鵑なきと別るの曉の空
一七四 同 夏衣きならの里の郭公かはらすと聞くの古声
一七五 同 といふのきならの里は名のみしと涙もる岸の松ささみし
一七六 同 竹の葉も袂とほちて唐衣きならの里は夕に露けし
一七七 同 かり衣きならの里に打そめぬしま松風や夜寒なる曉
一七八 同 唐衣きならの里に君をささてしま松のきまはくるしも
一七九 同 なきもくれこちせ山の時鳥きならの里の松の絶間に
一八〇 同 清河原

大和 類考

愚失 一七九 万六 紐とくす旅にしあるは我にして清き河原をみらくしをしも

仲遠 一七九 同 年へはれくも見てしかみ吉野の清き河内を滝つ白浪
知海 一八〇 同 七 蛙鳴清き河原をけしみてはらわ越きて見つと思はん
一八〇 同 九 苦しくも暮行日やも吉野河清き河原をみれとあかなくに
一八二 狐 百六月の清き河原にくしてはらふる事を神受つらし
一八三 同 夜くらて千鳥しは鳴椒生る清き河原に風や吹曉
一八四 新 六月影も清き河原の川ふろしにちりて引木の下も曇らす
一八五 愚草 小夜千鳥ハ千代と神やをしふらん清き河原に君新る也
一八六 名号ひろふてふ玉にもかみぬ椒生る清き河原に螢とふなり
一八七 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空

夢裏 一八八 同 夜くらて千鳥しは鳴椒生る清き河原に風や吹曉
一八九 新 六月影も清き河原の川ふろしにちりて引木の下も曇らす
一八九 愚草 小夜千鳥ハ千代と神やをしふらん清き河原に君新る也
一八九 名号ひろふてふ玉にもかみぬ椒生る清き河原に螢とふなり
一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空

人九 一八九 名号ひろふてふ玉にもかみぬ椒生る清き河原に螢とふなり
無者 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空

金村 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
無者 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空

中務 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
足家 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空

家隆 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
中務 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空

為家 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
伊平 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空

伊勢 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
為家 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空

知家 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
公朝 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空

清渚 伊勢 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
鎌倉 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
後醍醐 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
一八九 天木 伊勢の海の清き渚に駒とめて都へつと小貝拾はん

車持 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
金村 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
無者 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
元仁 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
基俊 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
顯季 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
衣笠 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
足家 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
信実 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
頼阿 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
無者 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
顯仲 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
娘子 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
左大臣 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
為平 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
為光寺 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
智恵歌 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
義詮 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
讃岐 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空
師九 一八九 草庵 霜さるて千鳥鳴なりみよしの清き河原の明方の空

一九九 建保伊勢の海春浦の霞分て玉や拾はん清き渚に
 一〇〇 同 よる浪も清き渚のすさみまておひある春のあまの袖哉
 一〇〇 同 伊勢の海の清き渚も霞分て春は塩玉の玉もひるはす
 一〇〇 同 伊せの海や清き渚の夕浪にひるはぬ玉は登なりけり

菊河

遠江 藤屋

一〇一 名寄渡らんと思ひやりし東路にありとはかりは菊川の水
 一〇二 夫木波に今うつして見はや菊河の名もたよりある星合の影
 一〇三 同 神無月また移ろはぬ菊川の星をはかれず秋に残れる

伎倍林

遠江 仙寛杉

一〇四 万すめら玉のさへ林に名をたててゆきおもしろいをうきたに
 一〇五 同 まへへまたらふすまにわたはた入なまし物妹かるとこに

清見関 為崎浦 駿河 類宇 蘆原郡

一〇六 六帖浪のたつくもみか崎にゆる千鳥誰見よとてか跡のやけり
 一〇七 秋葉横はしり清見関の通路にいとふことはなくともあつ
 一〇八 塩百足柄の山の紅葉をうなるな清見関に秋風そふく
 一〇九 六百清見瀧若しく袖の波のうへに思ふも侘し君か面影
 一一〇 同 衣手は清見関にあらねともたゆる夜もなき泪也けり
 一一一 山家集清見瀧月すむ衣手の浮雲は富士の高ねの烟なりけり
 一二〇 同 清見瀧神の岩さす白浪に光をかはす秋の夜の月
 一二一 拾玉山の端を何かいとはん清見瀧波間に月は入けるものを
 一二二 同 清見瀧月すむ夜はふしのぬの絶れ烟もしてたて
 一二三 同 東路や月のさかりを詠めさく清見関の秋の夕暮
 一二四 同 清見瀧月の光のさしぬれば浪の上にも雲相は置けり

足衛 倭成女 映侍 忠守

二〇七 名寄五月もて富士の高ねに消やらぬ雪に清見関も涼しき
 二〇八 月清見瀧はるかに神の空晴て波より月の寒いほる哉
 二〇九 同 清見瀧浪の千里に雲澄て若しく袖にさする月影
 二一〇 同 愚草きよみかた陳行駒も影うすし秋なき波の秋夕暮
 二一一 玉吟それとなき雲も心ほとめけり清見関の浪の明ほの
 二一二 同 みるまに心ほとめけり清見瀧関もる浪も立かへれとも
 二一三 夫木大方に物を思へと駿河なる月は清見の浦の秋かせ
 二一四 建保清見瀧関吹くゆる秋風にや遠さかる有明の月
 二一五 同 しのほる月は清見関の戸に出てやすふ有明の空
 二一六 建保清見瀧月につくぬを秋とも契らぬ浪にしほる袖哉
 二一七 同 過て行我さへつらし清見瀧の関は秋の月かり
 二一八 同 清見瀧月につくふ袖の上も秋色とや風ふくらん
 二一九 同 故人の浪の枕やきよみかたあくるはふしき月の影哉
 二二〇 同 ふしのぬの嵐に空は清見瀧有明の月によする白浪

為相 為家 無名 同

二二一 万すめら玉のさへ林のくみり我つめとこにもたなふせばとすまね
 二二二 来増山 近江 類宇 志賀郡
 二二三 拾遺我せとをきませり山と人はいへと君もきませぬ名ならし
 二二四 六百年月と思ふかひなく過にける君をきませぬ山の麓に
 二二五 同 客人宮 同 類宇
 二二六 新千分て鑑頼心にもふかきかな跡重くめし雪の白山
 二二七 客人の権現を
 二二八 客人の宮に奉りけり

兼盛 師頼 氣運 経家 西行

二二九 伎波柳久岡 常陸 仙寛杉 常陸国 真壁郡
 二三〇 同 客人の権現を
 二三一 客人の宮に奉りけり

兼盛 師頼 氣運 経家 西行

二二九 伎波柳久岡 常陸 仙寛杉 常陸国 真壁郡
 二三〇 同 客人の権現を
 二三一 客人の宮に奉りけり

兼盛 師頼 氣運 経家 西行

二二九 伎波柳久岡 常陸 仙寛杉 常陸国 真壁郡
 二三〇 同 客人の権現を
 二三一 客人の宮に奉りけり

兼盛 師頼 氣運 経家 西行

二二九 伎波柳久岡 常陸 仙寛杉 常陸国 真壁郡
 二三〇 同 客人の権現を
 二三一 客人の宮に奉りけり

二三九 統古爰に又光を分てやとすかなしん白ねや雪の古御
客人の宮にて花のちりけるを見て読る

二三九 統古の越路おほえてふくら今もかはらす雪と降つゝ
日言の客人の宮にて読侍ける

二三九 新古今ふとも越の白山志すはかしらの雪を哀ともみよ

胡河

同 兼雄

二三九 懐中何にかはけてみるへき別るもて形見恋しう人うきぬ川
木曾路河 信濃 八雲御抄

二三九 天不みせばぬいか信濃へきとら川君に田舎の深き渡りを
二四〇 同 やましの頼越くれば木曾路川波とひとに一つ蟬の声
切原 野辺 同 類子

二四一 松達相坂の関の岩がとふみならし山立出きりはらの駒
二四二 統拾々暮の月より先に関越て木の下くらき切原の駒
二四三 新統古の坂や清水に移る影も見す関路へたつ切原の駒
二四四 坂百楊村のしつてやくらき切原の駒引渡すあふ坂の関
二四五 名奇打むれて尾花あしけの秋駒の立渡ける切原の野辺
二四六 天木照月ばつめれる雪の心ちして玉と見ゆる切原のこま
二四七 同 信濃路やいく山川をへたてくぬけふ棚ひけり切原の駒

木曾 橋 脚 同 類子

二四八 坂百東路の木曾の梯春くればまは敷と立渡りける
二四九 同 わりばしや渡りかたきは信濃なるきとら橋の読問也けり
二五〇 同 後おほつかな木曾路の橋は年ふれとわけてて我はふみなりける
二五一 同 家集浪とみる雪を分てと漕渡る木曾の梯底も見えぬは

集巻

二五九 詠来五月雨に木曾の御坂を越侍てかけちに紫の庵をさす
二六〇 名奇かましの頼よりなる時女が木曾の麻衣まくり手にして
二六一 同 山田守木曾の伏屋に風吹はあせつたひして鶉なく也
二六二 散不今朝みれば木曾路の梅咲にけり風のはふりだすきまめらすな
二六三 大木駒なつむ木曾のかけらの呼子鳥誰とも分ぬ声聞ゆ也
二六四 同 時鳥御坂のかたに鳴へに駒めたしえぬ木曾のかけはし
二六五 同 我志は木曾の麻衣きたれどもあはぬはいとむねぞ苦し
二六六 天不いさする木曾の御坂に雪しみてはらへとのめまりてのこま
二六七 同 いさらはけりうにしはし庵せん木曾の御坂と夕日まじけり
二六八 同 東路や木曾の御坂を越行はふまふおれき雪の梯
二六九 同 さまに木曾のかけらをたひ入るをきつ帰る山人
二七〇 同 信濃なるすの光野はうと枯く木曾の御坂は紅葉しにけり
二七一 同 露結ふ小篠の原を見渡せば木曾の御坂に秋はきにけり

行 離

二六二 類聚本にもるきぬ山をみ渡せば晴る夜もなく雪は降つ

頭 輔

二六三 衣々山 陸奥 類聚本兼雄
二六四 衣々山 陸奥 類聚本兼雄

行 家

二六五 衣々山 陸奥 類聚本兼雄

長 明

二六六 衣々山 陸奥 類聚本兼雄

高 遠

二六七 衣々山 陸奥 類聚本兼雄

知 家

二六八 衣々山 陸奥 類聚本兼雄

義 将

二六九 衣々山 陸奥 類聚本兼雄

師 頼

二七〇 衣々山 陸奥 類聚本兼雄

回 信

二七一 衣々山 陸奥 類聚本兼雄

隆 寺

二七二 衣々山 陸奥 類聚本兼雄

冷 家

二七三 衣々山 陸奥 類聚本兼雄

肥 後

二七四 衣々山 陸奥 類聚本兼雄

記 伊

二七五 衣々山 陸奥 類聚本兼雄

頭 仲

二七六 衣々山 陸奥 類聚本兼雄

俊 成

俊 頼

同

西 行

定 家

光 俊

入 道

隆 房

盛 才

西 行

衣 笠

具 氏

俊 成

匡 房

頭 昭

能 因

北 國

牛 寛

本庭

椿磨

名寄或ハ藤塩ニ
武蔵

きにはと云物に雨降けるにちかき程にまさ
とまりあらは過ほやといひけるをきこて過
ければよめる

二七九 家集ちやせぬ涙の雨はふれともきにはとまりぬ物にそ有ける

吉備中山

備中 類号

二七四 拾玉船とめて契りし神のゆかりはけふも詠むるきひの中山

二七五 名寄春くは麓あぐりの霞と帯とほみゆれきひの中山

二七六 御集まかね吹吉備の山風打とけて細谷河も若そくせ

二七九 天不春くは細谷川に散つも花もてゆへるきひの中山

二七八 同 苗代に細谷河をせきかけて吉備の山田は帯を引也

二七九 同 まかぬふく音絶にけり五月雨の日散降行きひの中山

二八〇 同 夏虫も細谷川を照す夜は玉の帯するきひの中山

二八一 同 真金吹吉備の中山夏くはすなく螢の影すなく

二八二 同 雪ふみきひの中山跡絶てけ小まかぬを吹や煩らふ

二八三 同 春くる気色は空にしるさねなきひの小山の麓の霞に

二八四 同 麗まて鏡の嵐やすきふらん紅葉散くるきひの中山

二八五 同 冬くは細谷川に氷して玉の帯する吉備の中山

二八六 同 谷河へこまりの帯や結ふ音こきかぬきひの中山

木々村

同 天木 当国

二八九 木色こに染る紅葉のきふ村時雨けりとは今ぞ知る

吉備小嶋

同 藤塩

二八八 万六和路のきひの小嶋を過てゆかほつし小嶋おもほらんかも

二八九 夫木大和路の吉備の小嶋は遠けれとちへん庵へ浪間よりみゆ

二九〇 同 行末の心つしに大和路のきひの小嶋は霞あたり

記伊海

記伊

二九一 名寄記の海の底をふめて結ひてし妹が心ほりたかみもなし

二九二 名寄きの海に細引綱のおきかけてをく程みゆるうけの歌哉

二九三 同 浦人や浪間を分てき海のみなへの方に磯なつむ覽

二九四 新六 記の海をまさ吹上ふく風の早く相見し人は忘れず

二九五 夫木 記の海へマミの浦の沖つもの春の日くらしがく蒼人

二九六 千首 記の海や春は長閑に立かへてけ戸遠興つ白浪

記伊

記伊

二九七 万て人ならはふやまばこそ朝もよみきの川つらの妹しせの山

二九八 名寄春立て記の川しうく流るわり吉野へ奥に花や散覽

二九九 玉吟むぬもこえ袖にかけても朝もよみきの川浪は帰るせもなし

三〇〇 類聚思ひには契りも何お朝もよみきの河上の白鳥の閑

三〇一 夫木今朝よりは行瀬の水も朝もよみきの川上に氷しぬ覽

三〇二 万葉集朝もよみ記の河上をみ渡せばぬのみにけに雪降にけり

三〇三 同 爰よりもあまつみせん飯衣記の河水朝渡りして

記路遠山

同

三〇四 名寄何とし月をまたましゆらの崎猶雪かふるさちの遠山

三〇五 月清立田姫記の路の山を行れり松の外をほ染渡るらん

三〇六 詠古明渡るあしやみ浦の波間よりほのかにみゆる記路の遠山

木方

同 藤塩

三〇七 名寄かしと山花の盛や今がらしきかに雲の立渡るみゆ

大伴

公朝

知家

衣笠

玄信

為家

頼平

為平

無名

泰時

家隆

長明

行意

顯昭

337

為家

為家

為家

為家

為家

為家

為家

為家

為家

為家

三〇九 築垣朝もよみ木方へ行にかしと山越なんけふ雨な降そね

目山 同 藤壺

三〇九 万二千きりめ山行か山道へ朝霞ほのかににや妹にあはづらん

三〇九 天木見渡せば目山の山も霞つ秋津の里は春あきに行り

記閑 記伊

三二九 万四 我せが跡ふみ求あをひぬかは記の閑守やいとあんかも

三二九 詠藻引とむる方ことなけれ行年ほ記の閑守がうばらなくに

三二九 名寄朝もよみ記の閑守か手束ろゆるす時なく待へぬる君

三二九 玉吟引とめよ記の閑守か手束ろ春の別を立やかへると

城山 筑前 藤壺

三二九 万四 今よりはき山の道はまひしりけん我通はんと思ひし物を

木丸殿 同 類子

三二九 坂百橘の木なる殿にかほる香はとほぬなる物にも有ける

三二九 千五百 時鳥木の丸と云あまてあすくら山の思出のころ

三二九 同 朝倉や木のまる殿に誰とへは秋をまななる秋の上風

三二九 天木名ぬらぬと匂ふにしろし朝倉や木の丸殿に咲る桜は

三二九 同 あづくろやとはぬに名乗郭公木丸と云なる名をたてしと

三二九 新六 いたつに何かなのりを朝倉や木の丸殿におぬぬ物ゆへ

三二九 同 徒に浪にゆらるるなりのそ木の丸殿にいかうへまし

三二九 御栗朝倉や木丸殿にすむ月の光も名なる心こすれ

三二九 天木時しもに鳥を鳴なる朝倉や木の丸殿をうたふ明ほの

三二九 新業 これや此きのまる殿と思へとも名あらて行は知人もなし

吉志夫高 肥前 仙寛抄

三二九 万二 敷降きしみぬ高きすかしみと草とるあなや妹をてをとる

企歌浜 池 豊前 仙寛抄 企歌郡

三二九 万二千 豊国のもくみ浜松にも何とて妹にあひしやけん

三二九 同 豊国のもくみ長浜行暮し日のくれ行は妹をしと思ふ

三二九 同 豊国へ企歌の高浜たのへに君待夜らほづより更にけり

三二九 同十六 豊国のもくみ地なる菱のうれをへむとや妹か御袖沾けん

三二九 同十六 君もみにつくしにきくの池いひ出ぬより袖ぞぬれける

三二九 名寄朝ことに水す今は結みける霜かればはてしきくの池水

三二九 同 これよりや天川瀬につくくらん星かともゆるきくの高浜

三二九 玉吟やまの行きくの高松よともは秋の千年はしるくも有哉

三二九 天木よそにのみまきくの高浜ならへて心づくしに志や渡らん

三二九 千五百 足みし移し色はなからまし雪の花咲菊の長はま

霧島 大隅

俊頼 公謎 雅経 347

切符岡 未勘

三二九 拾遺朝またききりふの岡に立鶴は千世の日つきの始なりけり

三二九 天木あけ行はきりふの岡に立鹿は妻の行ふもみえすとや鳴

三二九 同 たちこむるきりふの岡の紅葉の色をば風へてにてそしる

三二九 同 箸鷹のきりふの岡の竹の露を尾ふの鈴とみかく月影

三二九 万七 若そくきしへ浦水によする波へにきりふのこころしけん

三二九 天木興つ風岸の浦水の吹あけに梢ふりたる松のいろかな

三二九 新業 これや此きのまる殿と思へとも名あらて行は知人もなし

三二九 万七 若そくきしへ浦水によする波へにきりふのこころしけん

三二九 天木興つ風岸の浦水の吹あけに梢ふりたる松のいろかな

三二九 新業 これや此きのまる殿と思へとも名あらて行は知人もなし

三二九 万七 若そくきしへ浦水によする波へにきりふのこころしけん

開都賀野

同

三四九 万二音妹をきつ野へのはなひきぬ我は忍びえすまなく思へは

往箕里

山城

萬葉抄并五代集歌花

三四四 万二立とまりゆきみの里に妹を置て心空なりつちふふれとも

三四五 名舟鳴捨てゆくみの里の子現に空なりあひぬ名残に

三四六 夫不妹か家にゆくみの里へ行人はあめしのしに祈る便也けり

雪消沢

大和

類考

三四七 風雅春くれは雪けの沢に袖たれてまたうら若き若なきを摘

三四八 堀春日野の雪けの沢に袖たれて君が為にとせりをも摘

三四九 蔵玉春の野を雪けの沢の引まくさ花開けり雪にふはれて

湯原

同

類考

三五〇 玉葉ゆのほらに鳴芽たつは我れとく妹にふれや時分すなく

三五一 天木時わぬ袖の涙を湯の原に鳴てふたつ言にやくうへん

弓槻嶽

同

類考 城上郡

三五二 万二足引の山川の瀬なるなへゆつきか高に雲にち渡る

三五三 同十かけうふう去くれはすつ人か高に霞に霞棚引

三五四 同土初瀬のゆつきか下に我れさせる妻あひねづしてれる

月夜に人見けんかも

三五五 名舟巻向の檣原杉原さへてゆつきか嶽に雪降にけり

三五六 同 さつ人のゆつきか高き春霞に引ころに成にける或

三五七 鹿草初瀬のゆつきか下にかくうへて人にしらぬ秋風を吹

三五八 同 初瀬山ゆつきか下に眼月あくるもしらぬ有明の影

三五九 玉吟 巻向のゆつきか嶽に雲あてあなし川波朝永せり

弓削河原

同

仙寛抄

三六〇 万二真鉞もてゆけけ河原の埋木のあらほまじき事にあらずに

三六一 千五百月雨のゆけけ河原の埋木も顕れけ社流来にけり

三六二 天木松木引ゆけけ河原の残はなれたるをいづくせこつたけれ為家

遊副河

大和

仙寛三河吉野三河吉野

三六三 歌一山神のたつ御調と春へは花かましら秋たては

紅葉がせりゆふ川の神も大みけに仕へまつると

上つ瀬に鵜河をたて下つ瀬には小調さしめだし

山河もよりてつかふる神御代かも

弓弦葉三井

同

八雲御抄

三六四 万二古にふる鳥かもゆつる葉みぬより鳴渡り行

三六五 同返し古にふる鳥は郭公けたしや鳴し我こふるこ

逆回岡

谷

同

仙寛抄

三六六 万二飛鳥川ゆきこの岡の秋萩はけり降雨に散か過なん

三六七 万二飛鳥河ゆきこの人やはさすらん岡へのつれ今盛なり

三六八 天木知しらすはしらす旅人のゆきこの岡になく有柳

三六九 同 山へのつま木に春はけてけりゆきこの谷の道の早蕨

三七〇 同 白妙のゆきこの岡とどろき冬にかはらす咲る卯花

三七一 同 時鳥夜半の名残はあすか河ゆきこの岡に又も尋ん

三七二 同 吾袖はけさもほりあへず飛鳥川ゆきこの岡の秋の白露

三七三 同 旅人の逆回へ岡の小萩原うつれはかはる袖の色哉

三七四 同 かち人のゆきこの岡の河童はおれふす方や道と成覽

三七五 同 夏と秋とゆきこの岡の小萩原明人一夜の風を待かな

374

373

372

三七九 天木玉ほしのゆきうの岡の初時雨紅葉の陰をんばは過へき
三七九 千百里人へゆきうの岡の小篠原風も幾度分て吹らん

夢野

摂津 一説ツツ野吹

三七八 山家夜を残すお覺に聞く哀なる夢野の鹿もかくや鳴聞
三七九 天木あはせつやいむとわららんうは玉の夢の鹿の諸声に鳴

湯田野

伊勢 藻塩

三八〇 名寄竹河やゆたの野をみればはるくと山田の原の松はくもれり
三八一 家集君が為ゆたのを分てひろひつるちひさの石に誰か逢へき

湯都盤村

同 類号

三八二 万一河上のゆつはの村に草むす常にもおもとこ乙女に
三八三 名寄小夜更く鳴やゆつはの村千鳥河上寒く嵐吹らし
三八四 同 川上のゆつはの村に過ぬめり此里まては夕立もせず
三八五 玉吟河上のゆつはの村の薄紅葉下草かけて露やとむ見
三八六 天木蚊遣火の烟たつなり里遠きゆつはの村に日は暮にけり
三八七 同 見渡せば涙も霞て河上のゆつはの村になく吳竹
三八八 同 伊勢路ゆく人や宿くん河上のゆつはの方も日は暮にけり

夢山

甲斐 藻塩

三八九 名寄都人おほつかなきに夢山をみかひありて行帰らん
湯坂 相模 藻塩

三九〇 名寄東路かゆさかを越て見渡せば塩木流るる早川の水
万木杜 近江 類号 高嶋郡

三九一 六帖ひろよりも万木杜に住鶴めやすきいもぬす恋あかしつゝ

歌定 三九二 名寄日暮れはゆるきの杜の驛馬すらも獨はぬしとあらそふ物と
為伊 三九三 同 雪ふれは万木森の枝こと夜にゆるき驛馬ののろふかとみる
三九四 御果しうき驛馬独ほぬしうきすせゆるきの杜の暮方の空

西行 三九五 十五白ひとりぬの友しや驛馬も降雪を万木杜に立もまはかね
三九六 天木春ふかみ万木の杜の下草のしけみにはむや育さきの駒
三九七 同 鳴蟬を声ふりたつる夏の日に万木の森は村雨さふる
三九八 同 時の間もいづか露へたまらんゆるきの原の草も葉末は

木錦園

近江 類号

隆心 三九九 玉葉ゆふきの日影のかつらをかざしもたぬくもあかる量の曙
俊頼 四〇〇 千 神受る晝の明にゆふ園の日のけりかつらへまざりける
吹雪 四〇一 天木をらこの卯花月夜あけけりはひるともみゆるゆふさき村
行師 四〇二 九 万九ゆき嶋の若ほに生る撫子は千世に咲ぬか君のかしらに
雪嶋 四〇三 玉吟志しくほなとほは雪の嶋にはほに咲るなてしこ花
堅阿 四〇四 天木雪嶋や若ほ撫子水越てやとる月へ移ひにけり
頼代 雪高浜 佐渡 藻塩

光俊 四〇五 現六降つく雪の高浜はた／＼とこがけも見えぬ越の浦風
湯羅山 丹波 藻塩

四〇六 名寄ゆら山の麓の松の松陰に立寄人も千世をこぞまて

門安島

遊布山

同 藻塩 二当量後有

四〇七 名寄万代と千度やちたひ若ねなるゆふの山こそ数は知けれ
夕日浦 丹後 藻塩

好忠 後鳥

内大臣

花園 不説人

具代

俊成

永乾 397

新吉

家隆

執事

為家

匡房

匡房 404

四〇八 藻塩いざふみ見にこそきつれ人方や夕日の浦の天の橋立
四〇九 夫木きてもとへ帰ると思へば下紐の夕日の浦のなみなき哉

雪白炭

但馬 八雲御抄

四一六 但馬なる雪の白炭もよせと思ひし物を人のと見えん
四一九 名寄さゆり夜の月の光に見渡せばその名もしらき雪の白炭
四二八 夫木浦つたふ跡さへみえて但馬なる雪の白炭千鳥鳴なり
四三三 同 月のすむ磯の松風さるしうくそみゆる雪の白炭
四四九 千首下ふれを聞おはかりそ月影は松を残さぬ雪うしら炭

夢前河

播磨

四二六 船うつつにはさうにもいはず播磨なる夢前河の流ても逢ん
四二九 夢前河を渡るとして

四二六 家基別てもねるとはなしに我みつる夢前河を誰にかたらん
四二七 夫木春の夜へ夢前河を漕渡り恋しき人にあふかまてしき

木綿崎

浦

同 藻塩

四二八 家基立獲る浦風いかに寒からん千鳥むねゆるゆふ崎の浦
四二九 懷中神のめす浦くことに漕過ておけてそまゆるゆふ崎のまつ

湯河

備中

備中国湯川といふ寺にて

四二九 説古山田もそうつし身こそ哀なれ秋果ねれば問人もなし
四三〇 行相坂 紀伊 藻塩

四二九 万九ゆきあひの坂の麓にさきもやる桜の花をみせんこもかば

柿茶 既知

湯等 崎海嶽

同

無名

四二九 万七妹か為玉を拾ふと記の國のゆりの御崎に此日くらしつ

四三〇 同 九朝ひらき漕出て我はゆりの崎釣する蜚を見て帰りこん

四三〇 同 ゆりの崎塩にけらし白神の磯浦葦をあへて漕とよむ

四三〇 同 名寄何として月をたまましゆらの崎鑑雲かる記路の遠山

四三〇 同 建保保咲ふは春もなかりけりゆらの漆の明ほの空

四三〇 同 名寄い塩路ゆりの漆を漕出ぬ上野の鹿の声かすかなり

四三〇 同 名寄草花鳥の白ひも声もさあらはあれゆらの御崎の春の日くらし

四三〇 同 玉吟記の國やゆらの御崎に風たぬア渡る船のぬきもとらなん

四三〇 同 千首月清みゆらの漆の汝千鳥夜ふかき空の霜になくも

四三〇 同 ありつやをしまか磯の松風に衣かすねよゆらみうらら人

四三〇 同 建保ゆりの崎塩にふまの拾ふてふたまたぬ袖は春の漆雪

四三〇 同 夕霞入日を波ゆらの崎うらら春行春の空かな

四三〇 同 たい波に霞を分て記の國やゆらの御崎も渡る船人

四三〇 同 波かくるゆりの御崎を春みれば霞の袖にむ白玉

四三〇 同 霞行ゆらのみさうの曙にあまのと渡る春の舟人

四三〇 同 行舟ゆらの御崎の夕なぎに霞も渡る波の通路

四三〇 同 夕浪の磯にちみほるゆらのとに玉をそよする春の塩風

四三〇 同 波の上も道あるみよる春風にゆらの御崎を渡る舟人

四三〇 同 天木 鳴鶴て行ふもしらす郭公ゆらのと渡る明ほの空

四三〇 同 天木 渡きよきゆらみ漆に鳴鶴よふねあほる声さくはぐなり

四三〇 同 天木 月来るゆらの漆や更ぬらん遠かた人の声し残れる

四三〇 同 行船ゆらの漆の興つすに現とてむけてよする浦人

四三〇 同 日にみかき風に波よる玉の踏ゆらの御崎に袖はひく也

四三〇 同 かのをす音にしらしも霧の間にゆらのと渡るともみす船

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

四四九 同 風ふけはゆふの夜ふしは船のしほしめられてせと過さば

俊頼

四四九 同 移ひし花より後のゆふ山に又雲や松の蔭のみ

入道前

由流伎橋

伊予

八雲御抄 當國
仙傳抄 伊豆

四四七 懷中 緑色に春はつれなくみゆるまのほしも秋は先紅葉けり

俊頼

四六九 同 千首出にけりゆふ山こしの観文またるつき月を残して

為尹

木綿問山

筑前

藤原

四四八 万三よしえやし恋しとすれとゆふま山越にし君がおもはゆるぞも

無名

四六九 十五ゆきの海士のほつての浦へをたぎてゆかんとするにいのこと

無名

四四九 同 四志つともくんとすれとゆふ山隠れし君を思ひかねつとも

人丸

四六九 同 しろくへ家にか帰るゆきの鳩ゆかんたときも思ひかねつとも

同

四五〇 九 堀百神無月ゆふまの山に雪やる麓の里や時雨降らん

頭仲

四六九 新六ゆきの鳩まきのこうし三年にて帰るすは宿をあらまし

仲文

四五〇 九 堀百神無月ゆふまの山に雪やる麓の里や時雨降らん

頭昭

四七九 同 けりてけるゆきの鳩なる語ひ松とくこ人のみるかりけり

基綱

四五二 九 名貴月草の花田の帯のゆふま山たえぬる妻を鹿や鳴見

無名

四七九 同 けりてけるゆきの鳩なる語ひ松とくこ人のみるかりけり

行能

木綿業河

肥後

仙傳抄 五代集歌抄

四五三 九 万七 我紐を妹が手もちてゆふは河又降りこんす代まてに

無名

四七九 同 けりてけるゆきの鳩なる語ひ松とくこ人のみるかりけり

施孝

四五四 九 月清 汝千鳥跡ふみ付と妹紐ゆふは河原の志形見に

無名

四七九 同 けりてけるゆきの鳩なる語ひ松とくこ人のみるかりけり

前内大

四五五 九 玉吟 ゆふは川夏行波の若小菅ぬきも足ぬ玉とみにたる

家隆

四七九 同 けりてけるゆきの鳩なる語ひ松とくこ人のみるかりけり

俊光

四五六 九 同 夏暮て流るゝ麻の木綿業河たれ水上に御叔しつ見

同

四七九 同 けりてけるゆきの鳩なる語ひ松とくこ人のみるかりけり

同

四五七 九 天木 ゆふは川波路もしうく明にけりとあさの舟のよる程もな

賦円

四七九 同 けりてけるゆきの鳩なる語ひ松とくこ人のみるかりけり

家持

木綿山

高

豊後

無名

四七九 同 けりてけるゆきの鳩なる語ひ松とくこ人のみるかりけり

龜山院

四五八 九 万七 乙せられふり分髪をゆふ山雲に隠して家のあたりみん

無名

四七九 同 けりてけるゆきの鳩なる語ひ松とくこ人のみるかりけり

同

四五九 九 万十 思出る時はすなみ豊四のゆふ山雪のけぬくおもほゆ

無名

四七九 同 けりてけるゆきの鳩なる語ひ松とくこ人のみるかりけり

朱勸

四六〇 九 名貴 春の日のゆふ山梅咲にけり朝のる雲と詠せしに

頼氏

四七九 同 けりてけるゆきの鳩なる語ひ松とくこ人のみるかりけり

安衛

四六一 九 同 神代よりおほくの年の雪積り白くもみゆるゆふ山高哉

為仲

四七九 同 けりてけるゆきの鳩なる語ひ松とくこ人のみるかりけり

同

四六二 九 散木 朝ぬれみゆふ山の時鳥はや打とけと思ひ乱れて

俊頼

四七九 同 けりてけるゆきの鳩なる語ひ松とくこ人のみるかりけり

中務

四六三 九 天木 神垣にたか手向とは知ねとも卯花咲るゆふ山の風

歌足

四七九 同 けりてけるゆきの鳩なる語ひ松とくこ人のみるかりけり

同

夢森

同

四八〇 犬木待かねてまどろむ程に時鳥ゆめゝ社にて今も鳴なる 法性寺

雪林

同

四八一 名寄くればぬの霞や今朝は向山らんゆきの春の明ほの 土御門

行合橋

同

四八二 明玉ほる夜はいはかりかは寒渡る霜と月との行あひの橋 明教

夕暮山

同

四八三 夫木鳴鹿の声もほのかに成にけり秋風うつむ夕きりの山 為相御

売比野

越中

仙寛抄

四八四 万てあひの野のすきまに降雪に宿をけし悲しくおもほゆ 家大母

四八五 同 あひ川の早き瀬ことばかりさしやつともあまほうかは立けり 同

目無河

未勘

春南抄二天和上ナリ
可尋之

四八六 帖あなれ川耳無山のみすきすありせば人を恨つらまし

四八七 新六見ればこそ色にもふけれ目無河ぞこと教へよ我渡りなん 光俊

松葉名所和歌集第十二終

松葉名所和歌集第十三 美

御手洗河 神 山城 史岩郡

四八八 奏巻かけののみみならし河のれなきに身のうき程といふしら
四八九 千五恋すともつらあふせも折哉是をほりけも御手洗の神
四九〇 同 恋せのみぞきと人やみならし河の夏はく人も
四九一 山家きみたらしのなればはつもはらぬを来しなれば浅きうもや
四九二 拾玉今よりもたためぬ人にあふせもは猫みたらし河に尋ねん
四九三 名奇神山麓をもとみ御手洗の若うつ波は万代のわす
四九四 新巻片岡の木隠過る御手洗の川音涼し夕やみの空
四九五 月清さのふかも絶ぬ御あれをみたらしの雲のつひけけや立さふ
四九六 忌草さきこと頼む心すみまさかの杜のみたらしのこゑ
四九七 同 見しけけよさくやまあふのすり衣御秘はきみたらしの浪
四九八 大木佛を雁みだらし河にうつろひて水のしへのともなりけり
四九九 同 だもしな御手洗川をせきかけてみしめはへたるみとしろの種
五〇〇 同 暮ゆけはさみなくさき岩橋のみたらし川に飛登かな
五〇一 同 月すむ御手洗川のほのしるもなまけりとも見え渡り哉
五〇二 同 かなさかの杜の梢といふよりみたらし川に月とそやけき
五〇三 御集も山のふもとのはの春風に御手洗川の水とくらし
五〇四 同 みたらしや神のちかひを聞おりと猫のみある此世なりけり

三皇尸山

山城

類字 宇治郡

五〇五 万二玉くしけみむろと山のさね高きぬすはみだりかてよしも
五〇六 万七玉くしけ三皇と山を行きは面白くして昔人もほゆ
五〇七 名奇春はつち秋の形見にほしみん紅葉とすす御望との山
五〇八 大木春もみる三皇のあたりけも寒みとやくるすの雪の村消

水名河

同 藻塩

五〇九 懷中のみみなりのみみはさきまき行水とてかみすなほ思ひせめけり

耳敏河

同 八雲御抄 拾芥云朱雲門判
二条南列柳

五〇九 帖もしきの大宮さきき耳敏河流て君を聞わたるかな
五〇九 一名きみと川さきはおほし大ぬきにかいふ事をたれが頼まん
五〇九 夫木六月にみと川にて御被くいなる事をは神も聞らん
五〇九 同 耳と河をよりつ代のなつことにはしのみぞき聞渡らめ

三香原

同 類字 相衆郡

五〇九 長秋のみかの原旅の宿りに玉鉸の道の行あひに天雲の
五〇九 六三の原ふたの野へを清みと大宮所定めけらしも
五〇九 拾玉影清き月ほ浪まにみ川秋の十日のけふみのほら
五〇九 同 泉川ことし今はみかの原みかさの山の春とまぢき
五〇九 百首長月の十日あまのりのみかの原河渡しうすめる月かな
五〇九 現六みの原ふりにし里の宮には山と河とそ跡残りけり
五〇九 新六桃の花咲や三月のみかの原この渡も今さかりなり
五〇九 忌草みか原くにの都の山越て音せ遠きさ虎のこゑ
五〇九 玉吟月影もけふみかの原泉川なみの宿せ今しほしめん
五〇九 大木遅桜ありとやけふみかの原河上たつ雲のかさる
五〇九 同 さ月さてけふみかの原時鳥しはしは爰にやとせ山
五〇九 同 秋の色もやみかの原泉川むすへは露の玉の井の水
五〇九 新葉春きても河風寒しみかの原たつ霞の衣かせ山

内大臣
藤原朝臣
無名
西行
経信

貫之 躬恒 中院入 元輔 金村 不審 慈鎮 同 永隆 光俊 定家 春隆 後九条 為家 式部 長規

御樂岡

山城

類考

北野野郎

五七九 後拾みし岡幾その世に年をへてけふの御幸を待てみづらん

五八八 新六御ゆきせしふるき北野のみこし岡あはれ音ほそな悲しき

五八九 夫木いよくもと北野の原のみこし岡とたもの跡もふりもさうらん

五三〇 同 みこし岡のあたりの雪や消ぬらんふさきあはして若くも也

御祖神

原杜

同

薄塩二下加茂リト云

五三六 百叠今はや恋のやつこの行末も頼む御祖の神に祈くん

五三三 諸人のみおやの神にましませはこむむち比身もすな

五三九 山集月のすむみおやの原に霜さえて慟遠たう声聞なり

五三九 是くめ國はまこ子の心としてわもの御祖を頼む斗せ

五三九 夫木けふはみなりにあふひをかす哉頼む御祖の神のしるしに

五三九 同 いにしへを思ふ心とさる哉みおやの杜に句ふ立はな

御萩野

山城

類考

桑名郡

五七九 十五豆誰もみだ頼みもくろみあれ山神のめくみにあふひともしれ

五三九 風雅又方のあまの若舟清よせ神代の浦や今のみあれ野

五三九 山集思ふ事みあれしのびにくすのめはすはももなしくと思ふ

五三九 名寄みあれ山岩ねを出る御手洗に宿る月と神さみにけり

五三九 一思草年をへ神もみあれのあふひ草いけてかへぬ身とはいひらす

御倉山

同

類考

五三九 六帖我恋はみくろの山にうつてんはとなき身にはなき所なし

五三九 千載みくろ山真木の屋たて住氏は年をへつ共絶しと思ふ

五三九 散木紅葉をみくろの山には霜はあさナ明てや置初つしん

美豆

御萩野川

同

薄塩云訓即

五五九 堀自春駒のいはゆる音ぞ聞ゆなるみづつこもこのみぬらし

五五九 建保まこも草すそす近に日やすみづつのみまさの五月雨のう

五五九 雨はるみづつのみまさのまこも草からてまきはす波の川風

五五九 秋風をみづつのみまさのまこも草かりにもけて行發哉

五五九 夏ふかきみづつのみまさのまこも草秋の露をやかて行らん

五五九 草ふりて發むなしく成ぬなりみづつのみまさのまこも草の空

五五九 五月雨に波の沢水いかならんみづつのみまさのまこも草の比

五五九 残すみづつのみまさの磯のをはねてはしあへぬ袖とみしき

五五九 拾玉まこもるみづつのみまさの磯のをはねてはしあへぬ袖とみしき

五五九 五月雨はみづつのみまさの水越て堤の上に波の川ふね

五五九 玉吟朝はらけ松山ふさかさしうかへるみづつ野の山あひのせて

五五九 夏かりのみづつのみまこも草は是やもえ出る秋の若草

五五九 奇ひはらたつみづつの上野に詠は霞なる波の川ふみ

五五九 ますけふる美豆の川せにさよ更て妻よふ瀬声すみぬ也

五五九 夫木けさは又雪間もとめて山しづのみづつの上野に若き摘也

五五九 里人も若きみづつ山城のみづつの上野は春めきにけり

五五九 打わたすみづつ入江の玉柳ぬいて緑の色さるなり

五五九 春くれはみづつ御牧の若草にあれば行駒の声そはなれぬ

五五九 一杜紅葉の色も見るべきと立ながらくそ波の川霧

五五九 山あふ袖かくらし風わたつみのうへへ春のあけほの

五五九 かりてはすみづつ御牧の夏草はけりにけりな駒もすあす

五五九 舟とむるみづつのみまさのまこも草からてかりねの枕にそしく

五五九 五月雨にあらぬしけみの末葉のみみづつ御牧に残るうき草

水縁

定衛

忠定

知家

範宗

行能

康光

西行

慈鎮

同

象隆

同

長明

師光

為家

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

三笠山 野 大和 類考 添上郡

五六八 万 三山野行 道はさなくもしけくあれたるかはあはれなく
五六九 万 三山野行 道はさなくもしけくあれたるかはあはれなく
五七〇 同 六雨隠みさの山を高くも月の出ぬ夜は更に
五七二 同 待てに我する月を妹かきる三笠の山にかくれてありけり
五七三 同 大君のみさの山の帯にせる細谷川の音のさやけ
五七四 同 八時雨の雨まなくしふれば三かき山梢あまねく色付にけり
五七五 同 大君のみさの山の紅葉ははけふの時雨にちりか過なん
五七六 同 十能登川の水底さへにてる迄にみさの山はさきにけるかも
五七七 同 春日なるみさの山に月も出ぬもさき山に咲る桜花のみろく
五七八 同 雁金さへはさにしより春日なる三笠の山は色付にけり
五七九 同 十一君かきる三笠の山にける雲のたてはついでと恋をするかも
五八〇 同 十二妹まつと三笠の山の山苔やますや恋ん令しなすは
五八一 同 春日なる三笠の山にける雲と出見る毎に君をと思ふ
五八二 同 三笠集雪しふらは立もかくれん春日なる三笠の山の末の松原
五八三 同 雨ふらはみさの山にける物もまたすくく雲のうへ哉
五八四 同 こだくて雨もさくぬみさの山にけりかくれる人ほあらしも
五八五 同 堀後天の下たえすも君はさゆへさみさの山の神をまつれば
五八六 同 駒なてて三笠の山へ行へはあめした祈るつひなりけり
五八七 同 三笠山ふりにし代より天の下ひきてまつるけふにぞ有ける
五八八 同 出家ふりさけし人の心せしければ今宵みさの月を詠めて
五八九 同 光さす三笠の山の朝日とせける代のためし成けれ
五九〇 拾玉 浮身迄たのしがるへき万代とよはふ三笠の山のひかは

金村	五九一 同	みさで山松の村立隙をのみさしてとるさき君が千年は	同
赤人	五九二 同	御笠山影を頼まぬ身成せば身をさる雨にぬれはてまし	同
安倍	五九三 同	雪にたに花のさかりと三笠山まことの春はいかはりけり	暮下
無名	五九四 同	詠藻ちとせとも中くこし三笠山松吹風に声さくゆなり	俊成
無名	五九五 同	今朝やしる花さきまにれと思ふ三笠の山に枝はつねつ	同
無名	五九六 同	月清うき世にも露わくるへき我身は御笠の杜のかけにわけて	後京極
同	五九七 同	三輪 田市山 大和 類考 城上郡	
大伴	五九八 同	三輪山をしかめくすか雲にまもあんなんちさふへしや	井戸王
大伴	五九九 同	神山(よ)とゆふ短ゆふかくのみ故になくと思ひさき	高市
無名	六〇〇 同	四味酒を三つわはふりけりふ杉手触し華に君にのみたき	丹波
同	六〇一 同	七行河の過行人の手折ねはうしふれたてり三輪の檜原は	人丸
人丸	六〇二 同	古にありけん人も我もや三輪の檜原にささしふりけん	同
無名	六〇三 同	八万八千まきか三輪の祝の山照す秋の紅葉のさくふしも	長屋王
同	六〇四 同	九春山は散過れとも三輪山はいまはつはめり君待てに	舎人
家持	六〇五 同	十夕さす蛙なくなり三輪河の清き瀬の音を聞はしよし	無名
家持	六〇六 同	十一家集とよひし人ありやと雪分て尋さくつる三輪の山本	源順
中務	六〇七 同	十二家集忘れしとふにまよらしみわの山杉の本には雨もりけり	貫之
仲実	六〇八 同	十三家集みわの山にひかりけり我宿のいり江の松はさきり	
兼昌	六〇九 同	十四家集けふよりは霞やまに立のほるみわの古里ほのかにみわ	元真
大進	六一〇 同	十五家集けふはつとせなしくみわの山しるしの杉を見えしと思へ	同
西行	六一一 同	十六家集けふはつとせなしくみわの山しるしの杉を見えしと思へ	永縁
同	六一二 同	十七家集けふはつとせなしくみわの山しるしの杉を見えしと思へ	仲実
慈鎮	六一三 同	十八家集けふはつとせなしくみわの山しるしの杉を見えしと思へ	季経

六二四 同 三つ山の杉立門をへとたにたぬぬ道に迷ふ比かな
寂達

六三九 万七 神ささる岩ねこりしくみましの水分山をみればかなしも
無名

無名

六二九 同 心こそ行ふもしらね三つの山の梢の夕ぐれの色ぞ
信足

六三九 新緑のまよしの水分山の滝つせも末はひとのなれ成けり
法師

法師

六二九 同 尋はやはかに三輪の市に出て命にかふるしありやと
隆信

六三九 新緑のまよしの水分山の滝つせも末はひとのなれ成けり
法師

法師

六二七 同 よそにても君をもし三つの市ならは行かふしに立をもくれし
有象

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

六二八 拾玉 春霞しるしの杉をこめつればと安見えす三つの山本
慈鎮

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

六二九 同 みの山につくに今夜宿まししうつつ雪の夕暮
同

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

六二九 同 五月雨に水まさるなり三つの川のとせのなぐさ涙ぐるまで
仲正

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

六二九 同 夜寒なるしるしが三つの里へのありとあるは衣うつせ
内大臣

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

六二九 同 かきくらし思ひもあへぬ夕立に市へはく三輪の山本
定円

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

六二九 同 御ぬきとる三つのはふりごととはん幾世に成ぬいはふ杉村
盛方

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

六二七 同 あさみとり霞にけりな石上留野に見えし三つの神杉
隆信

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

六二九 同 三つの山杉立門をへとたにたぬぬ道に迷ふ比かな
寂達

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

水分山

同

勅撰名所集三巻四
吉野郡

南瀬 山

大和 仙寛抄

三諸 山岸

同 類考 葛下郡

同

六二九 万七 神ささる岩ねこりしくみましの水分山をみればかなしも
無名

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

六二九 同 心こそ行ふもしらね三つの山の梢の夕ぐれの色ぞ
信足

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

六二九 同 尋はやはかに三輪の市に出て命にかふるしありやと
隆信

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

六二七 同 よそにても君をもし三つの市ならは行かふしに立をもくれし
有象

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

六二八 拾玉 春霞しるしの杉をこめつればと安見えす三つの山本
慈鎮

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

六二九 同 みの山につくに今夜宿まししうつつ雪の夕暮
同

六三九 夫木 御芳野の水分山の音高根よりす白波や花の夕け
清輔

清輔

定象

のおほき御門にみつ山と山をいいます耳高の
青宮山はせとものおほき御門にようしなへ神さ
ひたり名くはしき吉野の山はわけとものおほき

御いとに雲ぬにせ

御子守神

大和 藻塩

六九新六助ににて心の末をあらはさんかけてちかひしきもりの神

六九夫木とはやふらあまの若くらしひしき我にぞかたれみ守の神

六九七同 もろこひに今はなりなんみ守の神のしるしはありとせきけ 経家

宮古森

同 類聚三当

六九類聚すきゆかん三つ山をしらして宮古の杜の名を忘れせ

柘峯

美佐池

同

六九堀使伊勢ならはひか事せともや思はまやまなうてふみまをいけ

忠房

三宅原 路野

同 藻塩 城下郡

七〇九万三つつりみわけの原に当上は足をとてぬて夏草の

無名

七〇九同 ち母ににせぬ子ゆへみわけの夏野の草をなみくらかも

同

七〇九名寺諸共にみわけの原の女郎花おりつぬへき心もこそすれ

為家

七〇九新六もみさすみわけの野へ朝霞つかし道なへんたつらん

為家

七〇九夫木うらやましみわけのはらのふちはまき誰にむれてひもきとん 頭仲

水屋 河

同 類聚

七〇九類聚春日山水屋の水のすゑ迄も神にまかせて身も類哉

衣笠

七〇九夫木みわけのすゑきかけてかすかのめたのなはけふとるなる

為家

七〇九同 うつら水の隙の水屋川春日のほとに波や立ちん

同

七〇九千首思ふと今はやささは水や河なれをしは春日の神

為尹

見馴河

大和 類聚

七〇九新勅撰世中はなとやまなみ川みなれ初す有かりける

七〇九類聚いとけ共渡りやれぬみ川みなれし人の影や見とて

七〇九拾玉 五月雨の日をふらまにみなれ川みなれし瀬も面はりつ

七〇九夫木見なれ河のたすきふぬにとてん泪にうくと君にしとせよ

七〇九名寺たまきかにあせはなくてみなれは涙にいつむ比哉

三垣原 山

同 藻塩 吉野郡

七〇九長歌みもろの神なひ山に立向ひみかきの山に秋はさの

妻をまかんと朝つて明まこおしみ足引の山のこと

よみよひたも鳴も

七〇九玉葉天下くもりなけいと守しみかきの山にてす朝日は

七〇九集大空に雁を鳴さうねひ山みかき原に紅葉しぬと

七〇九同 かたもみかき原の鶯は花よりぬとやねとはなくん

七〇九十五百春さぬとみかき原はやすめ共猶雪でゆるみよの山

七〇九同 言をけふみかき原に袖ぬらしせりつむ斗物やおもはん

七〇九拾玉古柳のみかき原の大寺にとる御法の末をさるけき

七〇九同 秋の色は庭にそ残る古柳のみかき原の初雪のそら

七〇九同 色に見え袖に時雨のふる里の御垣の原の秋のころは

七〇九集集とりなけ御垣の原のはなれ駒うき世にあれば宿も定す

七〇九玉 吟まはさくみかき原の白露をあふますん侍人となき

七〇九夫木せりつみ御垣の原の鶯はみかき昔にや鳴ん

七〇九同 故郷にみかきの原の玉柳をのち来をせにはぬくん

七〇九同 思ふくこせまほしき所かな御垣の原の花のさかりは

不説知

河内

慈鎮

牛綱

実雲

人丸

為藤

中務

秋阿

家長

慈鎮

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

七二八 夫木 うちとか鳴渡るらん時鳥御垣の原もまた明ぬまを

七二九 同 もきさむる露のしら玉えたらから御垣の原の秋の初花

七三〇 同 古柳のゆかきか原の女郎花なり露けきのへにふすかな

七三一 同 故郷のゆかきか原の藤はかまたぬきかけし形見なららん

七三二 御集 秋ふかきみかか原の露にまじり鹿のくぐりくぐり

七三三 草庵 風さえて猶白雪はふる里のゆかきか原に鶯せなぐ

七三九 家集 幾年をつめ共さくらにわらぬはみかきか原のわかななりけり

宮滝 川

大和 類考 吉野郡

七三九 家集 瀬も早みみや滝河を渡りなほ心の底のすむ心とする

七三九 新 大なるゆきなはれと宮滝やうのなる石のうそかくれぬ

七三九 夫木 宮の滝むも暮行はる風にあつらふめはや桜成らん

七三九 同 水上にさくしもるらし宮滝の水にさえぬ雪かかれつゝ

七三九 山家集 滝あつらふしのおくのみや川の音をけん跡したはや

御金高

同 類考

七四〇 長歌 雪はふるといふの雨のひまかきかこも雪の時

七四〇 万代 古野吹くす風のさえしより金の御高は雪を積れる

七四二 方子 あさもよみきの河上を見渡せばわづみだにに雪降にけり

七四三 我恋 金の御高のねははみくくの世にともはましもの

七四四 詠藻 しろめや君と御高のはつても心のしめもけけつとは

七四九 夫木 君が代はけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

七四九 同 神のますこねの峯はのりときしめ山の跡とこそきけり

高遠

範宗

如師

中務

後鳥羽

頼阿

足家

嬰兒山

河内 方子集二巻

七四九 家集 我ことやうきねはなくと時鳥せり子山にへてこそきけ

御墓山

同 類考 一説大和

七四九 玉葉消にしようしと斗はみほか山先へ雲の行なうせよ

三津

安時津浦

撰津

西生郡仲勢

七四九 才一大伴の美津の浜にある忘貝家にある妹を忘る思ふ

七五〇 同 三つの崎波をかしこみもり江の船ゆく君かゆくかの嶋に

七五〇 同 塩がけのみのつての蛸女のくづもち玉もろらんいさ行てみん

七五〇 同 四 大伴のつとははしあかぬさし照る月夜にににあへるも

七五〇 同 五 大伴の三津の松原をか掃て我ならまたんはやかへりませ

七五〇 同 七 大伴の三津の松原をか掃て我ならまたんはやかへりませ

七五〇 同 朝はきに真帆漕出て見つゝ三津の松原波にに見ゆ

七五〇 同 十一 しよなと三津のはにふの色に出てはうみせ我恋くは

七五〇 同 大伴のみの白波あひたなくわがくらくも人のしらなく

七五〇 同 十五 大伴のみの舟乗漕出てはいつれの嶋に庵りせん我

七五〇 同 ねは玉の夜あかしも舟は漕中がみの安松待恋ぬらん

七五〇 同 六 帖むのりのみみつの塩江にすむ鳥の店はたへすも恋渡る我

七五〇 同 愚草 大伴のみの浜風吹はら松とも見えしつゝむし雪

七五〇 同 春の色はけふとみつゝのうらわめ若葉をあらふ白波

七五〇 同 夫木 あふ事はやとへたなとたまききのみのみなとに手向をす

七五〇 同 ゆくのたむけも見えず玉かきのみのみなとの五月雨の比

七五〇 同 夫木 世をすくふちのりのみの入日こそなにはのみのつてすなりけれ

七五〇 同 御集 心あらん人の為とやすむし人国にはのみのつての春の明ほの

山内

花山

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

近江

有象	七九	壩百みなせ川落る水の岩ふれて折へなしにのみぞ花咲	基俊
伊勢	七九	六官番人ごのみはわかにみなせ川わかれはあざき契りなるらん	季經
喬宮	七九	同 水は川あざき契へ思へとも涙は袖はぬけぬまぞけき	經家
慈鎮	七九	建保とにていづはぬ色とやみなせ川かはらぬ春の山ふきの花	順徳院
好忠	七九	同 花とのみながる水と水無瀬川とてく波にかりやぬなん	行惠
家隆	七九	同 水とみなせ川花とも水のしら波に露ながら春の明ほ	定衡
作者	七九	同 君もま十年やけとみなせ川くもぬみよの空の光に	俊武女
作者	七九	同 河水におられぬ色のみさきと花とみなせの春はのとけし	内侍
作者	七九	同 すまむせの流ともとし水無瀬川君のみかけの春のよの月	忠定
亦人	七九	同 水なせ川とこの玉もあもやきの夜にたふしつはなりけり	知家
作者	七九	同 水なせ河もぬ梢のつるより桜の波のたぬ日はなし	範宗
定象	七九	同 ちる花はうつりにけりなみなせ川山には春の色もなき迄	康光
高倉	七九	同 夫木庭にうつす山路の菊を水無瀬川ぬれてふきはす千世の松風	雅經
家隆	七九	同 山家集みなせ川遠の通路水満て舟渡りする五月雨のころ	西行
常盤	七九	同 拾玉流のわたり夜ふき空の時鳥みなせはらの雲路をぞ行	慈鎮
光明	七九	同 名奇みなせ山木のははらにならまに尾上の鐘の音をぞわつく	俊翁
未知	七九	同 雲来忘れや片野の御狩かりくれて帰るみなせの山の月	家長
未知	七九	同 草春の色を幾代かみなせ川がすみのほらの苔のみとりに	定象
定象	七九	同 すみ渡る月け清み水無瀬川むすはぬ水を氷とを見る	同
莖ヤ	七九	同 玉吟ちわつくともきけん鐘もみなせ山思ひやりや秋は悲しき	家隆
人丸	七九	同 夫木しられしなみなせ川里の時鳥今も悲しき昔のみ鳴とは	光俊
無名	七九	同 夫木みなせ川ゆきせの水のくたりやば春の日よりはやすいてけり	為家
兼盛	七九	同 御集衆もすがらあきの有明を水無瀬川路はぬ袖に宿る月哉	俊翁
元真	七九	同 思ふこともうねの夢にみなせ川さむる枝に残るふもかけ	同

三 国 山

撰津 仙寛抄

八三九 万七みくに山梢にすもむさひの鳥待かこ我待やせし

無名

八三九 山集風吹は花咲浪のよる度にくく目とる三嶋江の浦

西行

御 影 山

同 類考

八四九 純古世にあは又帰さん津の国みかけの松も面はりすな

基俊

八三九 月清三嶋江に夜かりしく乱芦の露もや今朝は思ひもくこと

同

八五九 夫木そのかみのみかけの山のもろ葉草けふはみあけしうしにともる

師光

八三九 玉吟みしえの玉江のまこ徒にわけて日をふる五月雨の空

定家

八六九 同 繁草ともやみかけの山へは月のかつらもことに見えけり

清輔

八三九 夫木かへる雁雲にきえ行有明の空もくこと三嶋江の月

後鳥羽

三 嶋 入 江 野 川

同 類考 嶋上郡伊豆野々

八二九 万十一みし江の江のまも刃にや我もは君に思ひたりけれ

人丸

湊 山

撰津 類考

八四九 斬勅湊山とことばに吹塩風にえ嶋の松は浪やかぐらん

後鳥羽

八二〇 同 みしき菅いよに曲なり時まはさすやなりなん三嶋菅並

無名

湊 河

同 類考

八二九 玉島巻しすとも母としんみし江におふりみくりのすもはたえしと

河内

八四九 拾玉みみと川けふのとよりをめにわけて夕日にぞく沖の友舟

慈鎮

八三九 堀百よせにのみ三嶋の茅の年もへてかりにたや今はとどくる

季経

八四九 同 湊川の音もくる松風の遠さかり行舟をしえ思ふ

同

八二五 同 忘れすまのく人をもし江の江のぞやれなりし茅のまよひに

女房

八四九 同 みみと川へくきねの友衛しほしも波に立空をさき

同

八二六 同 面影もはみし江の江のぞやれなりし茅のまよひに

隆信

八四九 同 渡し守むらましはみみと川くるとし海も是よりせし

同

八二七 同 建保みし江にけりほゆる蘆のねのよは春を隔さしにけり

左大臣

八四九 同 題林みみと河とつひかたもなりけり水まで行五月雨のころ

讃岐

八二九 同 時は今春にけりねと三嶋江のつくむあしにあは雪せふる

行意

八五〇 同 新六みみと河わすの馬は心せよなきさの舟もちあきけり

衣笠

八三九 同 おはうけの春の色とは三嶋江の波もがすみに宿る月影

康光

八五九 同 寄秋ふかき我友舟やみみと河生田の杜の木葉なるらむ

西行

八三九 夫木かりにても心をかへてみしき川今はのとけになりしなまし

馬内侍

八五九 夫木みみと河こき出てきけは時駒わたみみさの松になくなり

観亮

[illegible]

八九九 玉吟みまの浦の染付ふ白妙の袖の刷もろくみせねよ
八九九 名奇み熊の染付に成程はくへか君を恋かきぬらん
八九九 夫木み熊野のはしめの年をせふれは我身に残る浦の染付ふ

御裳濯河 岸 同 類考

八九九 世嘉集初春をくまなく照す影をみて月に先しうみしすの岸
八九九 同 みもすの岸の岩ねにせ龍てかためてたてる宮柱哉
八九九 拾玉 詠ははろき心も有ねへしみもす河の春のあけはの
八九九 同 神代よりおなし露や立くしんみもす河の春明はの
八九九 同 万代の秋のたおしとみゆる哉みもす河にすめる月影
八九九 同 袂までかけてと祈る神風やみもす河の末のし波
八九九 同 神風やみもす河のそのかみに契りし事の末をたひふな
八九九 同 詠藻神風やみもす河のされ石君の御代にぞ岩となるき
八九九 同 三建保夏の夜もす河のけり神風やみもす河に登る月影
八九九 同 同 みもす河の河せ涼も波の上に神代くもぬ夏の夜月
八九九 同 神風やみもす河の夕すみ君が十年の秋やきぬらん
八九九 同 建保神風に雲はけけは夏の夜も月影清くみもす河の波
八九九 同 やはらくる光はすし神風やみもす河の夏の夜の月
八九九 同 同 こ秋をみもす河の夕かつかけてゆふの波をすしき
八九九 同 同 ものしら衣手涼し神風やみもす河の夜半の月影
八九九 同 同 夏衣みもす河のせになひくたまもかりぬの床を涼しき
八九九 同 同 夏衣みもす河の神風にもつと知る水のし波
八九九 同 同 名奇神風やみもす河に契置しなれれの末を北のふも波
八九九 同 同 我妹かみもす河の岸にふふる人をみつと柏ともしれ
八九九 同 同 月清御もす河のひろき流に照す日のあまぬき影は四方の海近

家隆	九二五 愚草月宿るみもす河の郭公秋にくもあやすやあらまし	足巻
俊頼	九二五 玉吟夏引の糸もてとれぬなみもす河は千世もすむ	家隆
雅經	九二五 御集神風やへのさかきはおそねてもみもす河の末をはるけき	後鳥羽 ²²⁹
	九二八 同 万代の末も遂に見ゆる哉みもす河の春の明はの	同
	九二九 同 同 みもす河や頼をかくる神風の心にふかぬ時のまよなき	同
西行	九二九 同 同 えかたのあまの露しもいくよぬみもす河のちきのわたせき	同
同	九二九 同 同 日影にも音のすす神風や御濯川の波のくま	同
慈鎮	見瀬河 伊勢 夫木二当国	不説知人
	九三六 夫木すか山にせちに通ふみせ川の見せばや人にふかき心を	
同	同 同 同	
同	同 同 同	
同	同 同 同	
俊成	九三九 風雅君の代のしろしとこれに宮川の岸の杉村色もかはらず	後鳥羽
同	九四〇 新橋御祓するると宮河のしき波の数より君を猶祈る哉	朝勝
唱徳虎	九四〇 月清けふといへは春のしろしと宮河の岸の杉村色はななり	後鳥羽
行意	九四六 夫木なむれ出てみめとたれみす水かき宮川よりやねらぬめ	西行 ²³⁰
走衛	九四六 御集宮川の春に空のはつ風にうち出る波の花やちるしん	後鳥羽
俊成 ²²⁰	九四六 同 春の色もけふ宮川の杉の葉に吹くる風も神さみにけり	同
内侍衛	九四六 同 同 宮河やいもみとりの杉の葉に今入のほろ風をふく	同
忠定	九四六 同 同 久方の空ゆく風に雲消て月影さむし宮川の秋	同
知象	九四六 同 同 朝夕にあふく心を猶とす浪もしやに宮川の月	同
行能	同 同 同	
康光	未曾瀬 伊勢 名寄三当国	
後鳥羽	宮河の末わたるに水ののほりにかかるやうに	
祭主	見ゆるを爰はいつくとかいふなとかく水はのほろ	
後鳥羽	そといへはあふる塩のさすとして水のさかのほろ也	

爰はみせかせとん申といふをきこてと云
九三九 名 貴さかしはみせかせとてさしのほろすも過て行人にははや

長明 237

さめたてまつる所なり名をば御塩ととな
む申し云

240

参河池

同 藻塩

九三九 名 貴さかしはみせかせとてさしのほろすも過て行人にははや

宮路山 池

参河 類名 和名 宮路郡

乱橋

同

伊勢へくたりけるにふのつはしのすきわけ

ゆけはすゑに橋あり名をみたはしと云と云

九三九 夫 木花すきおのの床の乱はし秋の心にくへてせ行

鳴長明

緑野池

同 夫木二当国

三渡 磯

同 類名

九三九 名 貴さかしはみせかせとてさしのほろすも過て行人にははや

九三九 同 三渡のせわのうへちをふかし類みつ塩のむきけふかな

九三七 名 貴いせの海のみわたりくも浪間より枝をわかれぬめの松原

長明 240

宮橋

参河 藻塩

九三九 名 貴さかしはみせかせとてさしのほろすも過て行人にははや

三津浦

伊勢

いせにまかりけるにみつと申所にて海邊春暮と云事と

九三九 名 貴さかしはみせかせとてさしのほろすも過て行人にははや

九三九 同 心あてのいく朝霧に漕なれて浪路たしらぬみつの浦へ

長明

三河

同 勅撰名所集二当国

御塩殿

同 名 貴二当国

九三九 名 貴さかしはみせかせとてさしのほろすも過て行人にははや

九三九 同 右二見浦へ出ゆく道に小松原のなかに馬居

あり柱は見えぬとたぬれは神供のかた塩と

長明

三河

同 勅撰名所集二当国

九三九 名 貴さかしはみせかせとてさしのほろすも過て行人にははや

九三九 同 三河の渚瀬も落ぬ左提でしに衣手ぬれぬほす子ははに春日

長明

三河

同 勅撰名所集二当国

九三九 名 貴さかしはみせかせとてさしのほろすも過て行人にははや

長明

三河

同 勅撰名所集二当国

九五三 名奇うかりけるみか野の橋の朽もせて思はぬ道によもわたる哉

見付里

同 藻塩

九三三 名奇たれい来てみつけの里と聞かじいと旅ねぞ空ふぞろしき

三保 浦崎

駿河 類子 庵原郡

九五四 万三風早の三保の浦の白し見れともひなき人思へは

九五五 同 庵原の清見が崎の三保の浦のゆたに見えつ物思ひもなし

九五六 十五みは浦や清見が関に影やとす月は旅ねもいはさなりけり

九五七 草庵松に吹盛風さむみはほとやみはの興つに衝なくなり

九五八 同 清みかた関え過る旅人の心をとめてみはの浦まつ

九五九 愚草風寒みみはの浦へも漕舟に山の木葉さそひかほなる

九六〇 現六忘めや山路打出て清みかたはるかにみはの浦の松はら

九六一 一名奇清見かた夜舟さき出てみは崎松のうへ行月を見る哉

九六二 新六絶すのみもしは焼てみはの浦の松に煙立也

九六三 夫木夕影入海すしおきつ風松にたふるみはの浦のつなみ

九六四 同 みはの浦を月とともや出つらんおきのとやにふくるかりけは後鳥羽

九六五 同 忘めや山路うち出て清見はるかにみはの浦の松はら

九六七 同 松せつろしはかけてみはせは涼さきてみはの浦なみ

九六八 同 ふしの山高根の月とつして雪さきとするみはの浦なみ

美衣利里

駿河 八雲御抄

九六九 万廿橋のみえりの里に父をさて道なが路は行かてぬかも

御崎

伊豆

みさきと云所へより侍ける道に磯辺の

親王

松年ふりになるをよみ侍ける

九六九 玉葉磯の松いくひさくはか成ぬらんいたく木高き風の音かな

三嶋 神

同 藻塩 和名三寶茂郡

安西

九七〇 名奇良とや三嶋の神の宮柱たににしもめくりきにけり

安西

九七九 藻塩我恋は三嶋が洋に滑出てなをせつしあまの釣舟

安西

九七九 夫木雨すくるみのふの里のかき来にすたはしむる鶯の声

安西

身延里

安西

甲斐 夫木二宮園

安西

御浦里

安西

相模 藻塩 当国和名御浦郡

安西

九七九 名奇我心とをたみふみの次なより三浦の里のいかりせゆく

安西

御興崎 嵩

安西

相模 勅撰名所集 当国鎌倉郡

安西

九七九 百かましくやみこしの苔に雪消てみはせ川に水増る也

安西

九七九 名奇東路の道のなごちを尋きてみこしの崎に心とまれる

安西

美奈能瀬河

安西

同 八雲御抄

安西

九七九 万十四まかなしみさねにわは行かまくらやみはの瀬河に増満らんか

安西

九七九 名奇東路やみはのせ川にみ塩のる間も見えぬ五月雨の比

安西

九七九 夫木しはよりも霞やさきにみちぬ覧みはせ川の明るみとは

安西

九八〇 同 たちさかふ波のしほともへたりぬみはせ川の秋の夕霧

安西

九八〇 同 さしのほるみはのせ川の夕しはにみはの月の影せもかく

安西

足丸

安西

御嶽山

26ウ

同 藻塩

九八九 夫木古のよしのとつすみたけ山こかねの花もちこせ咲らぬ

隆弁

27ウ

鎌倉

安西

西行

仲正

西行

無名

為相

為相

為相

三吉野 里 武藏 類考

九八三 統後拾みよしのたのむの雁もひたふらに君かすにぞよと鳴なる
 九八四 同 送し我方によると鳴なる三吉野のたのむの雁をいつか忘れん
 九八五 月 清みよしの里下流にし秋の野にたれもたのむの初雁の声
 九八六 夫木 郭公につみよしの野の里なれてたのむの雁の跡しのぶらん
 九八七 同 行末はたのむのかりの玉つとぞわすれ形見にみよしの里
 九八八 千首わが方のよと思はてみよしの田面の月に帰るかり金
 九八九 名 寄時しもあれたのむの雁の別さへ花もちる比みよしの里

美奈能河 常陸 類考

九八九 統 拾波渡ぬ梅やみぬの川の流て刺とちりつもろらん
 九八九 新 後拾もはせの花のさかりやみぬの川 峯よりおつる水の白渡
 九八九 愚 草みぬの川 嶺より落る梅花にほひの刺のえやはせかる
 九八九 兼 行春のなれてはやさみぬの河 露入刺にくもる月かげ
 九八九 名 寄 散のる花の刺ととなりけるみぬの川 せの春のみなとは
 九八九 夫 木みぬの川 落ける峯はみぬらん山のはこめて咲く卯花
 九八九 同 つくは山とわたのさなへいととてせくわしたけさみぬの川 なみ
 九八九 草 庵 猫ふかき刺とやみらんみぬの川 日数も積る五月雨の比
 九八九 同 みぬの川 波もひとにつくはぬ雲をうきたつ五月雨のころ

見良石山 同 八雲御抄

九八九 万 三 ときり鳴東の国に高山はさにはあれとも明神のかし
 九八九 長 石 とき山の方じのみのほし山と神代より人のいひ
 とき国見する筑波の山を木木なり時しく時と

みすていははして恋しき雪けする山道す
 りとを(み)とわけるに

三津浜 浦里泊 近江 類考 志賀郡

地人 不知
 葉平 〇〇 堀後 近江 堀いぞり 浜松 おる 浪に 舟出や すらん みの 浦人
 〇〇 葉集 思ひ出よ みの 浜松 よとたつとしか 浦浪 たむ 秋を
 〇〇 拾玉 君か代にあふみの 海神 垣や人の ぬかひとみつの はまを
 〇〇 同 たのこし みの 浜松 神さびてよとに しくる 秋の 夕暮
 〇〇 名 寄 梅さくひし 山 風吹ぬし 花 浪とみつの 浜まつ
 〇〇 同 みたれとふ 夜半の 螢の 光にも 秋は かしとみつの 浜松
 〇〇 万代さ 浪やし 浦 風吹きて 夜寒 なるし みの 里人
 〇〇 愚 草さちこひし 昔は 今もしは けてた みえしき みの 浜松
 〇〇 玉 吟く ぬけは してとふら みの もの みつの 浜松 いと わきけり
 〇〇 同 有明の みの 浜松 すむ 鶴の子を 思ふ 子の 末と 久しき
 〇〇 同 浪はらへ みの 浜松 持と 年の やしうの 早すも 知らん
 〇〇 夫 木うしつら みの 女へ によるかひを 誰わが 為に びろ 初けん
 〇〇 同 あふみなる みの と ときを 打過て ふなて いなん 事とぞ 思
 〇〇 同 心あてりく 秋さりに こそなれて 波路た としぬ みの 女へ
 〇〇 同 もろ人ぬかひと みの 浜松 心に すすも しての 末とかな
 〇〇 同 万代と みの 浜松 風うらさえての ときさ 波に 氷おに けり
 〇〇 同 あまく なる 神も 哀と みの 浜松 の しめを かけて たの まん

御津河橋 近江 藤盛

〇七〇 六首 思ひぬがねその 木に ゆふ かけて 恋と 渡れ みの 河の 橋
 〇八〇 拾玉 しはは やねの みを みの 河の 橋は なみくに ぬゆる 神風の 空
 〇九〇 同 とにかくに 年にし 物ほ 神かきや びんの 山風の みの 河なみ

信定
 神主

同

後鳥羽

後鳥羽

鴨長明

好忠

行家

同

同

永隆

走家

慈鎮

信仲

寂蓮

同

慈鎮

西行

頭付

〇二〇 愚草類 こしるしもみつの河よとに今さへ松の風とすしき

三村山

同 類考

寛治元年悠紀歌近江国みむらの山

〇二〇 新勅時雨ふる三村の山の紅葉はなが折かけし錦いろらん

三井 寺 清水

同 類考 志賀郡

〇三〇 拾玉山川のひらなかれの三井の水いてて末のわかれ行らん

〇三〇 神道しきより三井の流石とりきてい代すむき神心ぞ

〇三〇 名寄さく浪や三井の古寺鐘はめいと昔にかな声は聞えず

〇三〇 同 いにしへの御代のはゆに汲初て遠くすむへき我寺の水

〇三〇 夫木さく浪や三井の玉水くみあけていたくすも我もなごん

〇三〇 同 わたつみのほはるあしたを待つくはやくわかれ三井の玉水

〇三〇 新葉にころなよせとこいれ底深き三井の清水と汲ぞめしより

水底橋

近江 藻塩

〇三〇 雲葉五月雨はみなぞめ橋名におひて浪と渡れ人ほよはす

〇三〇 夫木河上にはさくたへよ水底の橋のつへにや渡らせはありと

見目関

同 八雲御抄二当国

〇三〇 藻塩あふ事は鑑かた糸のわかれはかりみるめの関にゆるしやはせし

御祓河

同

永久四年十月衛宮宣旨家名所歌合近江国

〇三〇 夫木けしよりはめしゆる神もあらしかし御祓河にてみせきつれば

定家

〇三〇 秋集もろ人の十年のふてふ御祓河なすあさちの末もはるかに

〇三〇 題林みどき河ゆふしてかくるあさのはにやよきとむる秋の露

〇三〇 同 御祓河めさのゆふしてうちほらふ袖より秋の風や立ちん

〇三〇 同 みどき川さよ更かたにゆる波のめかや夏の別ならん

〇三〇 方集みどき川せ玉もの水かくれてしらね秋や今夜立ちらん

〇三〇 同集御祓河行お袖や更ぬらん露ながらも麻のひとふさ

〇三〇 秋集御祓河なすあさちを吹風に神の心やなみきはつらん

〇三〇 夫木夏はつるけふやなしの御祓河迎の風は涼しかりけり

〇三〇 車庵水の面にあさる葉なす御祓川としの最中やこいれ成らん

〇三〇 万九思ひて来れと来かねてみお崎其長の浦も又歸りみつ

〇三〇 堀後さく浪やこまにたちて見渡せはみおの崎にたむいて行

〇三〇 同 みおの海はみるあもふねうしとてやむかつきする海ながらけり

〇三〇 新六三尾山の袖のわかれ木のたおちに捨られながらふしは忘れす

〇三〇 弘安引くもあらはかくやは杓果んさきもうりけるみおの杉くれ

〇三〇 貞治近江為みおの御崎の浦風にくもらぬ沖の月を見ん哉

〇三〇 名寄三尾の海あみく氏の手もまきく立わに付て都悲しも

〇三〇 夫木さく浪やあふみのみおの山王嵐か野も行は花のかせする

〇三〇 同 高嶋の山の桜や咲ぬらんみおのさく木にかなる白雲

〇三〇 同 見渡せはみおのうらわりの夕なきに鑑波のへるおの嶋山

〇三〇 同 高嶋やみおの杣木の山くだしくるしき世とていとやはする

〇三〇 同 さく浪やよはつの宮に月すめはみえこそわたれみお崎遊

同

仁和寺

有光

長雅

後鳥羽

同

定家

不知

頼阿

基師

仲実

常陸

為家

高定

衣笠

高海

基俊

隆祐

衣笠

資隆

統知人

見道岡

同 夫木二当国

〇五四 夫木はくく見やりの岡のわかなしとせの春はつむべかりけり

頭輔

三上 山高原

近江 類客 野洲郡

水茎岡

同 類客 讃岐三有同名

〇五〇 万七 天霧あひ千端吹らし水くきの岡の漆に波立わたる

無名

〇七六 千 常盤なる三上の山の杉村や八百万代のしろなるらん

季経

〇五〇 同十 秋風の日にけに吹は水くきの岡の本葉も色付にけり

無名

〇七〇 夫木しほらやみかみのたけを見渡せばよのはに雪の積れる

西行

〇五〇 同 雁金の寒く鳴より水茎の岡くす葉は色付にけり

同

〇七〇 同 風わたるみかみの原や寒からしむがけて千鳥ははな

忠隆

〇五〇 万十二 水くきの岡のくす葉も吹かへし面しきりか見えぬ比哉

無名

〇八〇 夫木手向する紅葉にわけける三上山つりの袖も衣とも見え

降井

〇五〇 愚草けさは足跡かきたゆる水茎の岡のやかの雪のふりほも

定家

〇八〇 同 浪とまき南の海は雲晴て三上の山にすめる月かけ

後鳥羽

〇六〇 玉吟かきつね飛かり金の波にや色まきり行水くきの岡

同

〇八〇 同 御集あふみりやにはてる月は晴にけりみかみの嶽は猶時雨つ

法性寺

〇六〇 同 我袖ははるかに水茎の岡の本葉のかほまきりなき

同

〇八〇 同 三輪崎 同 仙寛抄三有同名

〇六三 建保 水茎の岡くす水茎の岡の本葉のかほまきりなき

同

〇八三 夫木思ふ事水茎川にみかみかみみたとわたりの人に見せばや

入道

〇六四 同 ねぬるまめしきの霜に水茎の岡の本葉は色ぞ移ふ

修成女

〇八四 万七 三の崎あら磯も見えず浪ならぬいづこよりゆかんよきみははし

忠定

〇六四 同 水くきの岡くすはわけて過て帰る日ともく秋風せふく

内侍

〇八五 夫木ももはや波のよせにも三の崎さへ舟橋かけし思ひを

光俊

〇六六 同 水茎の岡のくすふになくやりの浪まかへて村雨せふく

行家

〇八六 同 おき風のよせになくや波にみわのわたり春の明ほの

美濃 中山

〇六六 同 水茎の岡のくす吹しはりのせさみしき秋の暮

康元

〇八七 統古 色はるみの中 山秋こえて又遠くあるあふ坂のせき

美濃

〇六九 類聚 水茎の岡の梅のこもめてねての期けの風ふなり

公卿

〇八八 統拾一 かしみの中山隔つともつみははて関の藤川

美濃

〇七〇 同 御田屋寺せき入ておとす水茎の岡くす葉も波やすすらん

純明

〇八九 新葉数ならぬみの中山中くくはたてはてなは恋しからまし

行治

〇七二 新六 秋されはゆいしも降て水茎の岡のくす葉もし枯にけり

木笠

〇九〇 統拾道 都もほどほどと斗かへり見て関こえぬるみの中山

不誠人

〇七三 同 月影のせとははる水茎の岡のみなとに秋風せふく

公卿

〇九一 六帖わかしむるみの中山のひと松契る心は今も忘れず

中務

〇七四 同 せの葉のやく霜夜は水茎の岡のやかに臥せ低ぬる

巖庭

〇九二 名奇 一本の松は曇もなかりけりみの中山の秋の夜の月

市原

〇七五 車庵 せみのけの目数にまきる水くきの岡のみなとにせとほくしん

順阿

〇九三 夫木たつみなきみの中山に叫る鳥よはなとつめくみなりけり

為家

〇九四 同 松たてゝみづの山の本陰とて夜なき蟬もひとり鳴也

〇九五 同 玉がはめい見せぬにしみ山の豊の明のけさは恋しき

〇九六 七帖抄みの山にしに生たる玉柏豊の明にあふれたのしき

〇九七 名寄古柳と成にせしよりみの山の玉の葉かしはとも人もなし

〇九八 名寄つみの山にいつともわかぬ杉の葉もしるし斗の松風とふく

美濃中道

〇九九 名寄梓山みの中道絶しより我身に秋のくるとしりにき

御射山

二〇〇 玉葉尾花吹はやめくりの村にしは里ある秋のみさやま

二〇一 香雨抄りてほすはの薄のみさ山にやまはさやみたか成らん

御言河

二〇二 六帖をは捨の月をめてしみこと川ひかれて君かきわたりて

二〇三 同 ふこと川きけはふしく大船さにくはうさも神は聞しん

二〇四 夫木みや井とよくにけけたにゆかしき水もつしに成にける哉

御坂

二〇五 彼拾遺白雲のうへよりみゆる芝曳の山のたかやみさや成しん

二〇六 名寄千早振神の御坂にぬさまつりいはふ命は妹とふかため

やりてよみ侍りける

後九条

小升

成茂

好忠

盛久

盛久

躬恒

為仲

為仲

為仲

為仲

為仲

三巻山

二〇七 万十しもけのみの山のさなはのすまけしうけたけかたん

二〇八 堀白雲の絶間にみゆる水鳥のみの色の春の山のは

二〇九 新千載石のぬあせの河原に行暮てみかほつ崎にけふや泊らん

二一〇 同 千八すめらきの御代さかえむと東なるみちのく山に金花ぞく

都嶋

二一一 古今あきのて身もやくよりも悲しきは都嶋への別れなりけり

二一二 類聚別路に身をやくおきの教そへて都嶋へに飛登かな

美豆小嶋

二一三 純古今なりしお岩木もさるに悲しきはみつの小嶋の秋の夕暮

二一四 新撰撰さそふへきみつの小嶋の人むなし独りかへる都こひつ

二一五 玉吟聲とふみつの小嶋の旅人は都を恋る玉やうくらむ

二一六 同 小黒崎みつの小嶋の夕霧にたなとし小船行まじらすも

二一七 夫木心ありて鳴はめらし小黒崎みつの小嶋のたつの諸声

二一八 同 小黒崎みつの小嶋にすまはしと都のつとに人もさそけめ

美津江浦

二一九 夫木もしやくあまたに今はすまはしとみつの浦に煙絶つ

二二〇 同 さ夜ふけてみやこに出る月影をみつえの浦にこもみ見しかな

陸奥山

二二一 万十すめらきにほふ子ゆへにみちつくわたり乙女のゆいし紐とく

二二二 同 千八すめらきの御代さかえむと東なるみちのく山に金花ぞく

下野

八雲御抄并藻塩と当國

下野

下野

下野

陸奥

陸奥

陸奥

美豆小嶋

美豆小嶋

美豆小嶋

美豆小嶋

美豆小嶋

美豆小嶋

美豆小嶋

美豆小嶋

美豆小嶋

美豆小嶋

美豆小嶋

美豆小嶋

美豆小嶋

美豆小嶋

無名

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

無名

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

基俊

二三〇 拾玉をひすこそ物の衣は知と聞いさみちうくのおくゆかなん
 二三〇 名奇舟もも木葉もこしらに吹かへし袖もやすめぬみちの山風
 二四〇 夫木陸奥山もかひに見渡せば東のはてや八重のしら雲
 二五〇 同 こねはる陸奥山に立民の命もししね恋もするかな

御浦崎

陸奥 葉塩

二六〇 万十四芝付の御うし崎なるねつ草あひみつあしはわれ恋めやも

宮城野 原

同 類考 宮城野

二七〇 桐葉宮城野の露ふき結ふ風の音に秋かともと思ひこせやれ

二八〇 東葉みやきの秋かもししきまは露も心わすしも有哉

二九〇 堀みやきの草の草ぬも結ひ置て花見ん程は絶すがもはん

三〇〇 同 宮さの秋葉枝ち分行はうは葉の露に袖もぬれぬ

三一〇 同 時しあは花吹にけり宮さのふもとあしの小萩枝もたはに

三二〇 六百番鹿の音も虫もさう声絶て霜がはれてぬ宮さの原

三三〇 建保宮さ野の葉はき朝露を枝かき吹秋の風かな

三四〇 同 宮さのや玉をる萩のうは葉より移りもあへぬ色ぞこはる

三五〇 同 秋にあひてみとしる雨と下露といれかきさる宮城の原

三六〇 同 さとしらぬくねなかしやうつる露枝にまある宮さの露

三七〇 同 哀のみくもふかし露にすむ月を秋に宮城野の秋

三八〇 同 霜がはれたとこもさき宮さのふもとあしは下せさひしき

三九〇 同 とれはけぬよし枝ながら宮さのや萩の下葉の露の白玉

四〇〇 同 吹あへぬ風はいかなる色とにまに宮城の秋のゆふ暮

四一〇 同 宮さのやけりあさの衣手に露おもける萩の花すり

四二〇 拾玉我ものもつす斗の袖もかきけり宮城の萩が花すり

慈鎮

洞院左

名義

光俊

鎌倉

無名

顯仲

永祿

師時

永祿

家隆

順徳院

内侍

知家

定衡

徳成

家隆

志定

行能

康光

慈鎮

二三〇 同 宮さ野に尋きたれば秋萩の花は誠にこにとめつ

二四〇 拾玉宮城野も思ひ出るそ哀なるけり萩の秋のにはに

二五〇 月清哀いは旅行袖のなりぬらん木の下分ち宮さの原

二六〇 同 みやき野の木の下葉に宿りて鹿鳴床に秋風ふく

二七〇 思草かたる共はかり人やしらんみやきの野の夕暮の色

二八〇 同 宮城野にぞ待侍る萩のえの露もかきへて宿る月影

二九〇 玉吟宮城野の露分ゆけはかり衣忍ひもちすり萩の花揺

三〇〇 同 宮城野は宿る草も松虫のなくどかけの萩のうへの露

三一〇 夫木雄子鳴宮さの原のおすめるは花みる春もさめしはめれ

三二〇 同 心も色とこまにわけとめつはきに鹿鳴宮城の原

三三〇 同 心も色とこまにわけとめつはきに鹿鳴宮城の原

三三〇 同 心も色とこまにわけとめつはきに鹿鳴宮城の原

峯越山

陸奥

葉塩 和名 安達郡

三三〇 名奇尋来てわれこそ君をふはたみぬこし山路とはいつか忘ん

三方海 原

若狭

八雲御抄和名 三方郡

二四〇 七わがさなるみかたの海の決清みゆきかへらひ見れとあかぬかも

二五〇 六帖志とはみかたの原に出て見よまだあさかほの花は咲やと

二六〇 名奇をのつかしたにはのこれ夜半の雲月はみかたの海もさやし

二七〇 玉吟おは方のみかたの海の名もつしをわけて月を見るにも

二八〇 名奇夕月夜みかたの海の名もつしをわけて月を見るにも

山口

越前

葉塩

二九〇 雉鳴桑道の口たけふのふに我は有とおやにはかた心あひの風

宮崎山

能登

八雲御抄和名 能登

二六〇 名奇舟とむる若瀬の渡さよ更て宮崎山を出る月かけ

重敏

384

379

374

三重河原

同 勸業名所集并藻塩二当国

一九〇 万尤我量みへ河原の磯の裏にばかりかもし鳴蛙かも

一九一 名舟我だみ三重の河原にいくしたてゆふかたまで夏秋しつ

三尾浦

隠岐 藻塩

一九三 名舟思ひやれ浮めもみおの浦風になくしほる袖のしづくも

右後鳥羽院遠所より七条院御方へ奉り給ふと見えたりしかれば此浦彼嶋にある所也

真山尻

播磨 名所二当国

みやましりといふ所に泊て舟へ山にまかりて木がれむと云ふこと詠む

一九四 秋葉尋てもみやましりなとこそふへなけきこるには道まとも也

三草河

同 夫木二当国

一九五 玉吟忘れしな君に契りし友千鳥みくさの川のすまん恨は

一九六 夫木しる糸三草の川の秋風に誰うしかれて衣うつらむ

御船嶋

紀伊 藻塩

一九七 藻塩三熊野浦にみゆら御船嶋神の御船に漕めくる也

一九八 夫木そこの瀬に誰棹さてもみふね嶋神のしまりにこそまさせけん

三重滝

同 藻塩

一九九 山家集身にもろことの葉の罪頭いて心すみぬるみかさねのたき

三栖山

紀伊 藻塩

二〇〇 山家集待きつるやかみの桜咲にけりあしくあつしとみすの山風

水伝

同 藻塩

伊保丸 李経

二〇一 万ニ水つての磯の浦の若しもくさく道も又も見んかも

二〇二 夫木水つてのいそまのつし咲しよりあまのいり火夜もやはみる

三保岩屋

同 類字 同高郡

二〇三 万三しの薄くめの若子かいましける三保の若はみれとあかぬかも

二〇四 同 常盤なる若は今もありけれと住けるも常ばかりける

二〇五 同 石室アになてら松の木汝もみれば昔の人をあひ見ることし

二〇六 名舟きの国やみほのいはやもさすか猛風とさふるさ松にこたふれ

俊頼

三名部

同 仙寛控二当国

二〇七 万九三名部の浦塩なみちそね鹿嶋なる釣する巻もみて帰リん

二〇八 明玉浦今渡間も分てき海のみなへのかに磯なつむらん

光俊

御越石神

同 藻塩

中宮亮仲実くまのへまいるけるにつかはしける

内侍 俊頼

二〇九 秋葉雲のなるみしは神越人日そふる心にこそ思ふ

廬主

美毛登

同

二一〇 風雅有偏よりも無漏にぬる道なれば是と伝のみも成へき

西行

此歌は後白河院熊野へ御幸廿三度に成ける時みもと云所にてつけ申させ給けるといふ

水基岡

讃岐 類聚二当国或土佐

西行

倉人等 衣笠

法師通 同

法走 同

大僧正 俊頼

二九〇 万十うからふとみる山雪のいとしう恋は妹か人しらんかも

漆野

未勘

無名

二五〇 同 はしたの御狩りもりのゆふしてやとちをわけてふれる白雪

尤俊

二四〇 万十四みなのや芦かななる玉小倉菊に我せことへのたしに

美豆小河

同

同

二五〇 衆集きしかたを思ひに「れはみ」おちをわが外の物とはみる

俊頼

二四〇 新拾行かへりみつの小河にす草のみなれし跡もかすむ春哉

鳥家

二五〇 衆集きしかたを思ひに「れはみ」おちをわが外の物とはみる

同

二四〇 堀巨蛙鳴みつの小川の水清み底にぞうつる岸の山ふき

師頼

二五〇 万十四みくのいかにものはうすくわうへにとまろはへんまたねなふも

同

二四〇 御集春雨にぬれつゝあらん蛙なくみつの小川の山ふきの花

俊頼

二五〇 名丹うちなす宮のせ川のかほはなみゐてかぬらんきやもよひも

同

三嶋浦

同

好忠

二五〇 名丹うちなす宮のせ川のかほはなみゐてかぬらんきやもよひも

同

二四〇 就後操波のうつ三嶋の浦のうつせ見むなしかに我やなりなん

好忠

二五〇 懐中かすならぬみせきの浦に打するにすむ虫の心あるしん

同

二四〇 夫木しめゆく三嶋の浦の淡なさきしや袖ま君にまかせて

鎌倉

二五〇 懐中かすならぬみせきの浦に打するにすむ虫の心あるしん

同

二四〇 同 うかりける三嶋の浦のもしは火のまゐてこれてもますくせとや

不説人

二五〇 夫木しめゆく三嶋の浦の淡なさきしや袖ま君にまかせて

象長

三嶋江

同

二四〇 玉葉知せははりみしま江に袖ひめて七瀬の波に思ふ心を

頭仲

簾里

同

二四〇 堀百五月雨にぬるももしぬみの里の門田のさなへしそき取也

師時

松葉名所和歌集第十三終

美智嶋

同

45+

二四〇 夫木老の浪よもみ渡る旅なれは心もややみも嶋の花

高遠

御牧浦

未勘

二五〇 同 かすみさへたな引にけりはる駒のみまきさの浦のめまのたくなは

衣笠

美也次

同

二五〇 同 みや次のはさきのくすなわきさみの空のくろねかくへ見かし

元輔

御狩森

同

松葉名所和歌集第十四 志

白河 里野 山城 豊前郡

- 二五八 六帖 白河に玉しけり其みえなくに雲の林をあかしつる哉
 二五九 秋集 白草の花のかけまてつしつ音をかはらぬ白河の水
 二六〇 同 白河の松の色こき影みればつれか色もかはらざりけり
 二六一 同 若し楠子日の松の千世のかけすみて見えん白河の水
 二六二 同 白川の玉もはこよひ結みあけつちとにすまん尤しろしも
 二六三 堀 白河花やさかり成らむ白河の渡りたつとみゆるは
 二六四 山家集 白河の栢を見てとなくさむる吉野の山はかよふ心を
 二六五 同 しし川の春栢落着は花の詞をさく心とす
 二六六 同 風あらし木末の花の流来て庭に浪たつ白川の里
 二六七 同 行末の名やながれん帝よりも月澄渡るしし河の水
 二六八 拾玉 風をいとふ心も今はあらしかし花の波くす白川の里
 二六九 同 春さかしこもともろかに過して花におとろく白河の里
 二七〇 同 みな人の心にくる物やなに春のやまひの白川の雲
 二七一 同 花はまたし心は空に浅緑春めく比の白河の里
 二七二 名寄 花てしこの花はあたる種なほ今白河の野にぞ散にき
 二七三 月清 何となく春の心にこそはれぬけし白河の花の本まで
 二七四 同 にこりえに法の流の道もえて人をと渡す白川の里
 二七五 玉吟 身を捨て吉野の山にぬとも曲ひや出ん白河の花
 二七六 同 しし川の花の盤の木の木に大宮人のたねぬ日やなき
 二七七 千五百 うつもろ花の栢に日教へて風よりはる白河の里
 二七八 夫木 みぞのなる白川梅散かり春の垣ねに卯花を咲
 二七九 同 白河の名にそたかへけふみれば岸の藤波紫にして
 二八〇 同 白川の河にたてる女郎花けしの雨はや身をは知らん

貫之

高尤

元輔

同

国信

西行

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

二八一 同 しし河やちかきみてその系桜としのどなく君をさかへむ
 二八二 同 音羽より落る白河しらぬ共かはつゝ声はとめて来にけり

真如堂

山城

二八三 玉葉 弥陀頼む人は雨夜の月なれや雲暗ぬ共西へこゆけ

これは真如堂にまうて超世の悲願のたのもし
 き事を思ひながら我身の業障ともき事を
 おそれ思ひてまとうみて侍ける夢にけたか

き御声にてつけさせ給ひけるとなん

極原 同 兼塩

二八四 堀 白時雨に日教ふるともあたし山しきみか原の色はほらし

二八五 愛宕山 櫓か原に雪積り花つむ人の跡たにもなし

二八六 千五百 やまひける人の跡たに見えぬが櫓か原につもる白雪

二八七 夫木 あたし山また降雪も消なくに櫓か原に霞たなひ

城南寺 山城

城南寺にて祈雨御会社頭祝

二八八 月清 氏の名も神の恵みにうらふし都の南宮居せしより

標之野 同 ハ雲御抄蓬塩等当園

二八九 六帖 桜花咲てよりぬと人けいとわかしめしめさ花ならぬやも

二九〇 新古今 あすつらば若づまんとしめし野に昨日もけふも雪は降つ

二九一 続古今 たのわかなはなとわかしめし野沢の水に袖は沾つ

二九二 名寄 君にさし草とみしより我しめし野山にあさる人ばかりぞぬ

二九三 夫木 しめし野の霧のまされに女郎花たはれにけりな風をきく

二九四 新六 しらしらぬ往来に人のとよらん我としめしめしちふ宿りを

内山 既
不脱 知人

頭 仲
好 志

越 前

匡 房

後 宮 極

赤 人

御 製

八 九

八 道 条

知 家

二九〇 夫木 都へけのためにとしめし野に朝露はらひ若むとぞ摘
後景極

二九〇 同 我はらぬ人にとくる女即花何ゆへしめし野へならなくに
頭輔

二九〇 同 秋くれはつましめしめし女即花いく朝露に沾てみつらん
膳人

二九〇 同 さいたつまつら若かりし標之野のしめし薄ほに出にけり
膳人

塩竈

同 類字 愛宕郡

二九〇 古今君まさて煙絶にし塩かめの浦さひしくも見え渡る哉
貫之

三〇〇 統後塩竈にいづか来にけん朝ななきに釣する船も爰にあらん
兼平

志津原

同 兼塩

三〇〇 山家集 山かつの住ねとみゆる渡りかな水にあせ行志津原の里
西行

三〇〇 新六 宿しめてな山かつの志津原や静なるへきあたらすまねを
信実

三〇〇 夫木 霞さへなぬ煙に立そひて暗間もみえぬしつやの里
肥後

椎尾滝

山城 兼塩

三〇〇 名寄 音妹のなかる浪のむせふ声聞えやすらんしめのおの滝
長名

磯城嶋

大和 八雲御抄

三〇〇 懷中 大方のしきしめとやひてまし恋しきとの山とむるへ
後景極

三〇〇 月清 大和にしきしまの宮敷忍び昔もいと霧や隔つら
後景極

嶋乃宮

同 勅撰名所集 当国

三〇〇 万二 高てすす我日御子の万代に因らしれまし嶋乃宮はも
倉人等

三〇〇 同 嶋乃宮うへ地なるはち馬あらしむ行を君まです共
同

三〇〇 同 嶋乃宮まかりの池のなち島人目に恋て池にちつたす
人丸

三〇〇 同 高てすす吾日の御子のいましせは嶋の御門はあれでこましも
倉人等

三〇〇 同 朝日てる嶋の御門におほつかな人音も女すは眞浦悲しも
同

茂岡

同 勅撰名所集 当国

三〇〇 万六 け岡に神さひ立てさかへたる千世松の木の年のしなく
紀朝臣

三〇〇 兼塩 色かへぬ松の縁はけ岡の神さひたてて幾代へぬらん
紀朝臣

三〇〇 夫木 君かため枝さしけさしけ岡にもよ松の木のいやさかへ行
公朝

三〇〇 同 いにしへの子日くも成ぬらんふりてえくき茂岡の松
鎌倉

三〇〇 同 朝日影もりにぬ松のけ岡に篠風さやく霜の下草
観王

嶋山

大和 兼塩 当国 祝伊与

三〇〇 長歌 嶋山にあかる橘うすにさし紐とささけて十年ほさ
大伴

三〇〇 同 しめ山に照る橘うすにさしつかへ奉はまうち君たち
藤原

司馬野

同 兼塩

三〇〇 万十四 すら若き摘らんしめの野のしめし君も思ふ此比
長名

標野

同 類字

三〇〇 万一 あかぬさす紫野ゆさしめのゆき野守はみすや君か袖ふる
頼田王

三〇〇 新六 一のゆき紫野ゆさしめの杜はかすなから埋れにけり
為家

三〇〇 堀百 わ物としめ野にびし春駒のてにまかすすあれ増え哉
国信

三〇〇 愚草 又堅り天へ空行月影さるのれしめの秋の白露
定家

三〇〇 夫木 妹はけしめあさちふみ合てひれふる袖に若むとぞ摘
後景極

三〇〇 同 消やぬ紫野ゆさしめのゆきとれかとまかす春の夕暮
為家

三〇〇 同 秋の夜はひとりしめのさの庵袖こそ月の宿り成けれ
鴨長明

三九〇 名 奇 けはまたたか御萩をかしての崎ゆふとりして波もくすらん

如 春

四一〇 同 たちかへる心つかしきすかの渡りもあへぬ波にねる覧

範 宗

志 加 次

同 名 奇 歌 枕 テリ

三九五 齋 合 見しかの恋しきまに都島あさるとみしおほまてそ行

同

四一〇 同 忘れぬ恨しきもあはすかの渡りにけし身をそやすらん

行 春

塩 合 次

伊 勢 藻 塩

三九〇 名 奇 二見鶏もちう妻やいかねん塩あひは駒のつめもかくれす

長 明

四一〇 同 夫木あひみつ猫おほつか宮中山やしかすかの渡りる覧

能 宣

三九〇 同 月はたひる川山に雲消て尤もみちぬ塩あひの波

同

四一〇 同 うれしきはけふしかすかの渡りにて都出たる人にあひぬる

同

篠 間

同 歌 枕 テリ

三九〇 名 奇 おふの海にしのよの海士のやつて風のかしらめ塩あひの世や

俊 頼

四一〇 同 白菅浦 湊 遠 江 類 寄

雅 経

志 賀 須 香 渡

参 河 類 寄

三九〇 春 集 行かぬ舟路はあれとしかすかの渡り跡もなくそ有ける

源 順

四一〇 同 万 廿とへはみしは磯とにへ浦もあひてあはれともわはん

大 相 部

四〇〇 同 わきもみち家路のみ分しすかの渡りたもおもほゆる哉

兼 盛

四一〇 同 名 奇 東 路 の し は 磯 の 若 枕 し け も と みて か へ る 波 哉

春 隆

四〇〇 同 ゆけとみぬれくまらぬ旅人はたしかすかの渡り成けり

定 春

四一〇 同 あふ人の心もしぬ東路にしろは崎をみせしと思

家 長

四〇〇 名 奇 秋 風 に 鳴 め を た て し か す か の 渡 り し 浪 に も ち と 思

順 徳 院

四一〇 同 夫木うき事をしは磯のしき波もいか成御代に哀かへん

家 長

四〇〇 建 休 か く し つ 春 ぬ る 秋 は し か す か の 渡 り も 浅 き 契 と 思

行 意

四一〇 同 うしととも猫しがすかの渡りしるも波の行ふとしへ

親 王

四〇〇 同 たのまれぬ人の心としがすかと思ひ渡りて年のへぬらん

定 衡

四一〇 同 名 奇 夏 水 か き し み つ な り せ は 駒 と あ て し は す ま は 日 は 暮 ぬ へ ン

長 明

四〇〇 同 憂ながら猫頼むかなしがすかの渡りさへこそ移ろひにけれ

家 隆

四一〇 同 名 奇 夏 水 か き し み つ な り せ は 駒 と あ て し は す ま は 日 は 暮 ぬ へ ン

長 明

四〇〇 同 逢見もあはても歎くしがすかの渡り物うき夢の浮橋

知 春

四一〇 同 名 奇 夏 水 か き し み つ な り せ は 駒 と あ て し は す ま は 日 は 暮 ぬ へ ン

長 明

妙 井 渡

同

名 奇 歌 枕 テリ

しみつと渡りといふ所をすくとして

長 明

師 曲 追 山

同

名 奇 歌 枕 テリ

長 明

四一〇 百十一 荒熊の住といふ山のしはせ山貴てと共汝名はつけし
四一〇 名奇君すまはとく人物あら熊のしはせの山をいかにゆ共
四一〇 新六しけり行しはせの山のくつと暮るも長き六月の空
四一〇 夫木あそくまの馴て住なるしはせ山まよいにかはけしからん

志豆機山

駿河

四一〇 堀百しけり雨まなくしはせはするかなしははた山も錦もりかく
四一〇 同後散しけりしはた山の紅葉もさき地にもれる錦もとみ
四一〇 拾玉錦もろしはた山の初時雨けりたぬきと成にける哉
四一〇 同 紅葉らるしはた山の梅鹿は錦もきてや春を恋らん
四一〇 夫木もももするしはた山の唐錦だんはは風のまに

志太浦

同

名所歌集と常陸有馬名

四一〇 万 したの浦を朝漕舟はよしなはに漕しめかよひにさかめ
四一〇 夫木したの浦の漕出る船めもはるにや遠さから旅の侘し

塩山

甲斐 類考

四一〇 新後塩山の山さしての磯の秋の月八千代すむへき影とみえける
四一〇 新士さよ千鳥空にこさなけ塩山の山さしての磯も波やゆらん
四一〇 玉吟冬の夜の有明の月塩山の山さしての磯に千鳥鳴なり
四一〇 新六さよも月もみちける塩山の山さしての磯に雲もかす
四一〇 夫木やももも千鳥鳴な塩山の山さしての磯に跡を尋て
四一〇 同 声はみは八千世ときけは塩山の磯へ千鳥ためしにさく
四一〇 同 子規なくしは山といふにはななし小舟出とわつらふ
四一〇 同 塩山さしての磯の明きに友もふたの声聞ゆなり
四一〇 同 雪ふれば都の内も夜もすからみは塩山の心もさすれ

人丸

四一〇 御集塩山の山さし出の磯のしき波に千とせも祈る友樹かな
四一〇 七

後鳥羽

衣笠

山

滴森

常陸 類考

四一〇 万 筑波嶺ののぼりてみればおはなるしつと田井に雁金も
四一〇 同 懷中妹により夜半にやゆり滴山に露けく成さざる
四一〇 同 現六夕立のしつと杜の下草は秋のよそなる露やもくしん
四一〇 同 夫木春雨のしつと山の散花は木の本ことのめとれとせみる
四一〇 同 時は雨の峯吹くたる秋風に滴の田井は意なるなり
四一〇 同 夜もすから滴の山にうしふれて妻を思ふは草鹿の声
四一〇 同 五月雨にしつと山の子規しのにぬれては夜中に鳴
四一〇 同 梅がえの花のたるひも若とく滴の山にさゆり白雪
四一〇 同 草庵つは雨の山さきくもる五月雨の滴の田井に早苗とる也

衣笠 六条院 光俊 顕季 後鳥羽 頼阿

無名 説知

白雲山

同 葉塩

四一〇 敦忠 世中にまたし雲の山のひめかちやつし心成覧
四一〇 同 公忠 おりのはりみろかひもなし白雲の山と頼みし君しめえねは
四一〇 同 衣集 白雲の山はるかに聞ゆるもなとか日高く出たをさする
四一〇 同 浮事もまたし雲の山はにからやつき心なるらん
四一〇 同 夫木 つは雨の白雲山のたつにわが皇をあふくせけり
四一〇 同 やへたてろ白雲山の梅の花みみみの風に匂はさしめや
四一〇 同 ときしに立し雲の山桜春をかきぬていくさかもねん
四一〇 同 志太浮嶋 同 葉塩
四一〇 同 六音番恋をのめしたのうき嶋浮沈みあまにも似たる袖の波哉
四一〇 同 古来浦風に塩路の末も霧晴て月に成行したりき嶋
四一〇 同 夫木あきさなるうなみ瀧も見渡せば霞に浮ふしたの浮嶋

頼政 保季 陸信 資宣 元真 正房 栄盛

柴浦

常陸

夫木見ク

四一〇 夫木海士のな柴の浦風吹まに烟とみえてつ千鳥哉
 四七六 此歌は鹿嶋社へまゐり侍けるみちにしは浦と

いふ所をすくれば千鳥のむれたらぬ千万と
 云はやりとわたるをみるに日のかけろふにしかか
 ひて雪のふるかこしくなり又煙のたつにも似た

りければ流けると云々

志賀 浦山里海
 疾手 近江

四六八 万一さ波の思賀の辛崎 幸あれと大宮へ船待めぬつ

四六九 同ニさ波のしかに波しくく常に君のおほしかりける

四七〇 同三馬いたく打てな行といきなめてみても我んしかにあらくに

四七一 同七さ波のしかに津の蜃は我なしにいさりはせと波たす共

四七二 同 さ波のしかに津の浦の船乗にかりにし心常忘れす

四七三 六帖さ波のしかに山路のつらさをくる人絶て荒やしぬ覽

四七四 堀百さ波のしかに浦風うめしと思ひおほも渚なりけり

四七五 同 へしれすみるめもとむと近江なむしかのうしみて過す此哉

四七六 同 後まなしぬ人ともと越にけるしかに山越の跡もなければ

四七七 同 家つとにおれる杵をちらさしといきとすつるしかの山越

四七八 同 立渡り嶺の霞はもろともしかの山越するや有けん

四七九 同 嶺つき花に心のまじりつゆきもやとれすしかの山越

四八〇 同 中空に行もやられすおほかな霞晴せぬしかの山越

四八一 同 しかの山にほど越つれと霞にさへまもよぬぬ哉

四八二 六百番花ちれば道やはよけぬしかの山うたて杵を越る春風

光俊

134

四八三 六百番さどはれていのか山路を越ぬれば散行花とさる人成ける

四八四 同 散つる花をふましと思ふまに道こそなけりしかの山越

四八五 同 春はた雲路を分る心地して花こそみえぬしかの山越

四八六 同 匂はすはくく空と思はまし花散まふしかの山道

四八七 同 道もに花の白雪ふりともて冬に帰るしかの山越

四八八 同 むかし誰しかに山路をふみ初て人の心を花にみすくん

四八九 同 古郷に思ふ人ある家つとは花にぞみゆるしかの山越

四九〇 同 もちれたやまたみぬ峯は霞にて猶花おもふ志賀の山越

四九一 同 春ふかみ花の盛に成ぬれば雲を分る志賀の山越

四九二 同 波をよる奴も見ろめはなき物をとつみ馴たるしかの里人

四九三 同 玉はさき手にとる程も思ひきやかりにも恋をしかの山人

四九四 同 さ波やしかに津の蜃に成はけりみゆるめはなぐ袖のしほる

四九五 山家集 春風の花のふきに埋いて行もやらぬしかの山みち

四九六 拾玉 散まかふ花に心のむすほれて思ひみたるしかの山越

四九七 同 かほりくる花の春風身にしめて山越くす志賀の里人

四九八 同 汀にもあらぬ桜の枝にさへさ波もするしかの山かせ

四九九 同 雁金の歸るあはれはとよりけりしかの山の春の曙

五〇〇 詠藻 照月も光をそへてみゆるかな玉もせかへすしかの浦波

五〇一 名寄しかの海霞ながるとみえつる花のさ波もする成けり

五〇二 詩歌合 朝妻や雲のをちこちかすむ也花があらぬしかの浦浪

五〇三 千五百しかの浦に花のさなみ漕分て釣する海老と袖匂ふ覽

五〇四 名寄うち渡すしかに浜江に水越てもも通はぬ五月雨の比

五〇五 同 しかの興やいつくも霧のへたこん浪より出る在明の月

五〇六 同 ふりぬとして志賀の都を山里に誰住なれて衣うつらむ

五〇七 月清さるにやふもとの波もかほるせ花の香おろすしかの山風

経家

兼宗

隆信

季經

信定

頼昭

寂蓮

女房

柳太君

女房

家隆

季經

西行

慈鎮

同

同

同

俊成

隆房

業清

寂蓮

通具

成茂

後醍醐

法
師

一〇 神道しきより三井の流にひとりきて幾代丁むへき神の心と
五四三 百神

田宮河原

同

一〇 夫木明渡りしのみやは霧晴て遠かた人の数とみえ行
五四四 夫木

篠原

同

寛治元年大嘗会悠紀方試之近江国歌

一〇 名青朝まき野原篠原雪深み旅行人の道はいくつと
五四五 名青朝

一〇 拾玉月のなかりの山をめぐりてよみは過ん野路の篠原
五四六 拾玉月

一〇 同 近江路や野らの篠原多行はしかりより帰るさ波風
五四七 同

一〇 新六篠原やまた夜をさむる旅人の晩閑は道たどる也
五四八 新六

一〇 大木相坂や旅行人のしほしにひととせとよりとぬ物かは
五四九 大木

一〇 同 しほとやさうくくたさかなにて旅行人としとめはや
五五〇 同

一〇 同 くれがさうのちのたひ人分過て露のみやとすの篠原
五五一 同

塩田川

信濃

名青歌花井塩田川

一〇 名青若高きしたの河船うけてさしほりたる月をみる哉
五五二 名青若高

清水里

同

篠原或橋唐

一〇 堀俊ありたてしみつ里に住ぬれば夏は外にさそ渡る哉
五五三 堀俊

一〇 同 夏くれは伏屋かしたとあぐかくて清水の里に住つさぬへし
五五四 同

一〇 名青またしぬ人をさし信濃なる清水里に袖と沾ける
五五五 名青

信濃道

同

一〇 万十四しなものは今のはり道かりはねにあしふしむなうけははせ
五五六 万十四

標茅原

下野

類客

一〇 六帖しもげやしめちか原のさしも草をの思ひに身をやぐとん
五五七 六帖

一〇 名青秋くれはしめちか原に咲さむる秋のはひぬにすかる鳴也
五五八 名青

兼邦

一〇 新六草たちし標茅か原は霜枯て身は有増の類たになし
五五九 新六

俊成

一〇 夫木頼めししめちか原の下敷下にもえても年へにかな
五六〇 夫木

尤俊

一〇 同 下野やしめちか原の草隠さしはなにしもゆる思ひぞ
五六一 同

下紐閑

陸奥 類客

一〇 詞花東路はるけき道を行めくりいつかへき下紐の閑
五六二 詞花

一〇 新六うつとも夢ともみえぬ程はかり通はゆる下紐の閑
五六三 新六

一〇 新六立帰リやへたてん今夜さへ心もとけぬ下ひもせき
五六四 新六

一〇 六百あひみしと思ひかたむる中なれやかくとけかた下紐閑
五六五 六百

塩竈浦 磯沖 同 宮城郡

一〇 六帖塩のまの浦漕つらん船の音きこしがとにさく悲しや
五六六 六帖

一〇 同 しほの磯のいざとつみもて御代の数とぞ思ふへになら
五六七 同

一〇 家集塩竈の浦く舟の音よりも君さうらみ声とまされり
五六八 家集

一〇 拾玉塩のまの浦の煙のうは霞みかき哀と立せひにける
五六九 拾玉

一〇 同 しほのうらめしとみ思空に恋の煙も立せひにけり
五七〇 同

一〇 同 なめれ佐々空に思ひの夕煙焼塩かまのうらめしのみや
五七一 同

一〇 建保春よいか花鶯の山より霞むはかりの塩かまの浦
五七二 建保

一〇 同 塩かまのうらめしとみ渡る雁金ともほしかに帰る波かな
五七三 同

一〇 月清哀いかに心あり海士のなかららん月影霞む塩かまの浦
五七四 月清

一〇 月清それと猶心の果は有ぬへし月みぬ秋の塩かまの浦
五七五 月清

一〇 愚草塩竈の浦の浪風月さえて松と雪の絶間也けれ
五七六 愚草

一〇 玉吟波のうら松の風色もたぐひし烟たな引塩かまの浦
五七七 玉吟

一〇 十五百春くれはもとより絶ぬ煙さへ霞とみゆる塩竈の浦
五七八 十五百

一〇 同 山風に花の波立みよしの古野の春や塩かまの浦
五七九 同

衣笠

俊成

尤俊

甲斐

能宣

左大持

李経

伊勢

忠岑

伊勢

忠鎮

同

同

定家

定家

後白河

後白河

定家

保季

保季

衣笠

同 同

六二〇 現六 白川の関のあらしの宮柱たせにたてしちかひ成覽

六二一 月清明ぬより春の霞も立やせんとよほすな日河関

六二二 愚草 白河の関の関守いさむと時雨の秋の色はしとし

六二三 同 くるもあくとく心をさくらさて雪にも成ぬ白河の関

六二四 玉吟し川の関のしる地のから錦月に吹く夜は木枯

六二五 同 雪の色はまた白河の関のうに曙しうさつくひすの声

六二六 夫木思はずは心ゆく奥へしやは越かたかりし白川の関

六二七 御集雪にし袖に夢路も絶ぬへしまたし河の関の嵐に

六二八 建保使めは都へけし雁金もけし越る白川の関

六二九 同 ぬちのふくしらぬ山路をかきさて夕霧ふかし白河の関

六三〇 同 何となく哀とふかし行方もまた白川の関の夕霧

六三一 同 あはれさはいくも果とし河の関吹くゆり秋の夕風

六三二 同 行すあもまた霧深き夜をこめて誰白河の関路の巾覽

藤塚駅

陸奥 藻塩当国

六三三 名舟しのかのむや〜と待侘しはむなく成にけう哉

標葉埦

同 藻塩

六三四 堀百東路やしねはさかひに宿りて雲にみゆわつくは山が

塩津山

越前 山寛抄二巻圖

六三六 一万三塩津山打越行は我のける馬とつまへく志心ししも

六三七 統古知ぬらんゆきになれて塩津山世にふる道はからき物とし

六三八 新機撰朝はけひをたさかけて塩津山吹く風に積る白雪

白山

加賀 類字

六三九 万十四たふすま白山風のぬなへとも子らがともさあうとあしも

六四〇 六帖し山に降白雪のこさうへに今年ももろ恋もする哉

為氏

後紫極

定家

同

家隆

同

後鳥羽

定家

俊成

後鳥羽

康光

六四一 物詠 君が行くし白山しねとも雪のまじり跡は尋ん

六四二 冬集 白山の峯ははる雪ののこまたに降てみゆらめ

六四三 同 待くもみえぬは夏もし雪や猶りしける越の白山

六四四 同 年をへて雪降るも白山のかける雲やいれ成らん

六四五 同 しる山の雪のなこりは寒くともかたみの風はあふきつゆけ

六四六 同 白山に雪降しきて寒くとも絶すあふきの風を忘るな

六四七 堀百なやや此我身は越のしる山がしらに雪の降つもる哉

六四八 拾玉ひとせは冬のおくにも成にけり都にふかし雪の白山

六四九 詠藻集はて越路をへるあらし玉の年降こも雪の白山

六五〇 万代初雪のしるのさははたてしかとこもみえぬ越の白山

六五一 月清春はたふほろ月夜と見る月も雪に隈なき越の白山

六五二 愚草 面影に思ふもさみし埋れぬはかたに冬の雪のしら山

六五三 同 かきくす都の雪も日教へぬけさいならんこの白山

六五四 十五百花も雪も色はぬはらし帰雁都のこすも越のしら山

六五五 同 白山や雪猶ふかし越路には帰雁にや春を知らむ

六五六 御集しる山の松の木陰にいくろひてやすしにすめるしの鳥哉

藤原

加賀 類字 近江有間名

六五七 新古世中はうきふしけ藤原や旅にしあれば妹夢にみゆ

六五八 統古衣手に夕風寒ししの原や時雨の野へに宿はなきて

繁山

越中 藻塩

六五九 新六しけ山のそかひの道の谷あひは夏もて風の吹ぬ日をなき

六六〇 夫木 我宿にみきうつて見んしけ山の露に匂へる山吹の花

六六一 同 しけ山のほくしの光ほみえて不間幽に明る東雲

兼輔

永持

源順

重之

中務

同

頭李

幕下

俊成

後鳥羽

定家

同

宮内卿

秋阿

後鳥羽

俊成

行意

同

為家

頭朝

為氏

叔羅河

同 八雲御抄二當面

六八〇 万九しくろ河なつてのほり平瀬にはさてさし波し早瀬には
六八七 同 しく羅川瀬も尋つ我せはかはたさね心なくさ
六八八 同 十五百かひのぼるう船をしけみくろ川瀬の波やく暮火の影

夜谷

同 八雲御抄并仙實抄二當面

六八〇 万十六ふたにの二上山に驚そさうつむといふさしはにも

君が御爲に驚そさうつむといふ

六七一 同 十七馬ひめていざ打ゆかむしふ谷の清き磯間にする浪見に
六七二 同 すめ神すそまの山の夜谷のささのありそに朝なきに
六七三 同 夜谷のささのありそにすする波いやくく古ふもほゆ
六七四 同 白波あそそにすするしふ谷のささ秋はりまつたえの
六七五 同 しふ谷のありそにすするしふ谷のささ秋はりまつたえの
六七六 同 同十九しふ谷をさして我行こ夜に月夜あきてん馬しましとあ
六七七 同 夫木ゆきもよに夜谷の浦を漕出て釣する海士は袖やぬる覧

信濃沢

越中

六七八 万十七越の海のしほのう来を行春し永き春日も忘て思へや
六七九 同 現六いづよりけふ味そめぬ越の海のしほのう来秋の初風
六八〇 同 夫木こしの海や信濃の沢の秋風に木曾の麻衣雁を鳴なる
六八一 同 駒なめていぞくしとれと越の海や信濃の来は末と香けき

飾磨

江里市

播磨

飾磨郡

六八二 万七しかま江は漕過ぬらし天伝ふひさの浦に波立る見ゆ
六八三 同 同十五わつみの海に出たるしかま川絶人日にこそ我忍やまめ
六八四 同 堀百谷霞しかまの海もこめつればおほはなしや蚕の友船

大持伴

六八五 同 後かちそむろしかまのみそのかれ果てあひみて過し神無月哉
六八六 同 八百谷あひそめて後けしかまの市にてもよかれかちそはかへとぞ思ふ

兼昌 頭昭

同

六八七 同 出敷集はき名とそしかまの市に立にけりまたあひ初め恋する物を
六八八 同 拾玉恋とそみかまのかちのあひ初て帰るへしと思はりしを

西行 慈鎮

無名

六八九 同 名寄しかま川はやくさ夜とそ更にければ一か月の海に出たる
六九〇 同 水上に誰か御秋としかま川海に出たる麻のゆふして

中務 衣笠

大持伴

六九一 同 新六はりまなるしかまの里にはす藍のいつか思ひの色に出へき
六九二 同 播磨はるしかまに作るあめ鳥つあなはちのこそめせんとは

信定 走家

同

六九三 同 建保はれぬまにま朝霧を立ちめてしかまの市に出る里人
六九四 同 草も木もくる比や商へしかまかちも色増る覧

走家 鳴鹿院

同

六九五 同 愚草君か代は誰もしかまの市にそある民天々空かな
六九六 同 玉吟しかながらしかまの市のかた底久しき御代に作り重ぬ

走家 家隆

同

六九七 同 夫木しかななる市女ももてるかち布の色がくのふ人恋
六九八 同 いとまきしかまの市に立民もしに教とそ君か代の秋

中務 俊成

敦浪関

播磨

名寄歌集二當面

大持伴

六九〇 堀百逆風にいたてはしれくし船し浪の関せとそむ共

大持伴

為家

七〇〇 堀百塩土山 美作 葉塩

俊頼

公朝

七〇一 同 名寄いつとなくしはたれ山のされ水喜行まに音そへつて
七〇二 同 同十五名寄いつとなくしはたれ山のされ水喜行まに音そへつて

譜岐

無名

七〇三 同 類聚白かぬの山のあひなる梅の花す代ふへき句ひこそすれ

匡房

公実

七〇四 同 類聚白かぬの山のあひなる梅の花す代ふへき句ひこそすれ

備後 葉塩

七〇三 六帖しとみ山あらしの風のはやけれはる紅葉とときぬ人そなき
七〇四 堀使郡山あらしの風のはやしに榮のしほもあけぬ比哉
七〇五 散木しとみ山風はあらしと郭公声はともしぬ物にと有けら

常陸 257
七〇六 出家集しや君昔の玉の床とてまくらん後は何にかはせん
しろみねと申所に御臺の侍けるにまいるて

西行

塩屋浦 里

紀伊 藻塩

雅王 親王

七〇六 千五百沖つ風塩屋の浦を吹からばのほりもやらの煙かな
七〇七 名寄こととはん塩屋の里に住蚤も我ことからき物や思ふと

為家

白崎

同 八雲御抄

無名

七〇八 万九し崎は幸ありきて大船に真槌しぬき又歸りぬん
七〇九 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ

無名

白神磯

同 仙寛抄吉国

無名

七〇九 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ
七一〇 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ

無名

白良夜

同 紀伊 藻塩

無名

七一〇 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ
七一一 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ

無名

白鳥関

同 類聚二当国

鴨長明

七一一 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ
七一二 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ

無名

志古山

同 藻塩

西行

七一二 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ
七一三 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ

同

白嶺

同 讃岐 言葉書讃岐国歌中

西行

七一三 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ
七一四 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ

同

白鳥関

同 類聚二当国

鴨長明

七一四 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ
七一五 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ

同

志古山

同 藻塩

西行

七一五 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ
七一六 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ

同

白嶺

同 讃岐 言葉書讃岐国歌中

西行

七一六 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ
七一七 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ

同

白鳥関

同 類聚二当国

鴨長明

七一七 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ
七一八 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ

同

志古山

同 藻塩

西行

七一八 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ
七一九 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ

同

白嶺

同 讃岐 言葉書讃岐国歌中

西行

七一九 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ
七二〇 万九し崎の塩塩干にけらしし神の磯の浦箕さあへ唐とよむ

同

七三〇 同 しる雲のかける嶺とみえつるはしがの嶋はあらぬ成へし

七三八 六百よそにやは釣する志加の菫もみん枕の下をしとせにほ

七三九 玉 吟我恋はけのあまへ焼塩の日もたえず立煙かな

七四〇 夫木今日せしる志加津の菫の住里に菫さそふ花のしるへに

七四一 同 しがのあまの釣するも舟うけたらず心に思ひ出てきにけり

七四二 同 志加の菫の塩やく畑立しと人にしる浦風ぞ改

嶋浦

筑前 八雲御抄

七四三 万四大和路の嶋浦わにもする浪あなげん我恋まくは

七四四 名寄大和路さほ山嵐吹にけり嶋の浦わに紅葉散けり

白河

筑前 類考

七五〇 俊撰年ふればわが黒髪もしし川のみつわくむ迄老ける哉

嶋原

肥前

七四六 新六瀬出づ嶋またしは嶋はらにもろし船の誰を待らん

清水宮 寺

豊前 夫木二当國

七四七 夫木ほさはやなしのおりかけてはす衣しみの宮の流絶せて

七四八 堀後宿をいては尋てゆかんし水寺名にたけはすみやとまると

四極山

豊後 類考 大分郡

七四九 万三はつ山打越くれば笠ぬの嶋着かくる棚無小船

七五〇 六帖四極山岩奴はかりわれのける馬そつまく家恋ぬらし

七五一 夫木しはつ山卯花ふきのかり庵やもとこもさらぬ雪の下伏

七五二 同 塩風はつ晴渡るしはつ山漕出る船も月やみろしん

七五三 同 四極山なごま柴におさきてぬらふさつものたゆみな身や

同 七五〇 一ま抄しはつ山橘の若葉にもる月の影ゆる迄夜は更にけり

有家 茂森 大隅 夫木二当國

七五五 六帖思ふ事何もかさらにみ山なるしけりの杜は我としなん

七五六 名寄み山なるしけりの杜の下紅葉いつともりてとむる岸ぞ

不説知

為家

塩崎浦

未勘

七五七 山藁集こたひく網のうけ縄よりくめり浮しめある塩崎の浦

七五八 鮎後夜とにも哀しほるこ枝かなしのまの菫の袖もからぬと

素師

志能麻

同 類考

ひめさの

志都石里

未勘

七五九 万三大なむ七すくは彦名のいましけんしつ岩屋は幾代へぬ覧

敦野

同

七六〇 万十君に恋うらふれをれはしきの野の秋萩のき小鹿鳴也

信濃野

同

七六一 家集しなつとくさかつへにをく露みかける玉とみえにける哉

忠房

南指岡

同

高市

同

七六二 堀後村消し雪も外にはみえなくしるの岡は猫そつれなき

七六三 夫木わたくなやしろの園に若菜摘がまりありく翁すかたよ

頭昭

同

俊定

嶋門

同

俊成

信頼

不説知

西行

親盛

生石村

無名

小又君

隆源

順徳

同

同

同

七六〇 万三すめろきのとほのみかたありかふしまたをみれば神代しを思ふ

滴浦

同

七六五 丈夫たまくしのしつゝの浦にみえ塩のつれをちりもよする白浪

塩浦

同

七六六 表集塩のうしろあひつもあはす歎けん人のうしろ我身成けれ

七六七 丈夫あひきすとあひつゝの塩の浦の霞をたる雲のよひ声

嶋根御湯

同

七六八 白草一夜ともて下になくひはなけれ共しまねのみ雨はさむるもなほし

白石

同

しら石のすも過とてよめる

七六九 表集とへかしな沖の白石しらすとも物おもふねのなきこころを

嶋萩原

未勘

七七〇 万十思ふ子の衣すしんに匂ひせよ嶋の萩原秋たすとも

俊光

伊勢

隆季

兼昌

俊頼